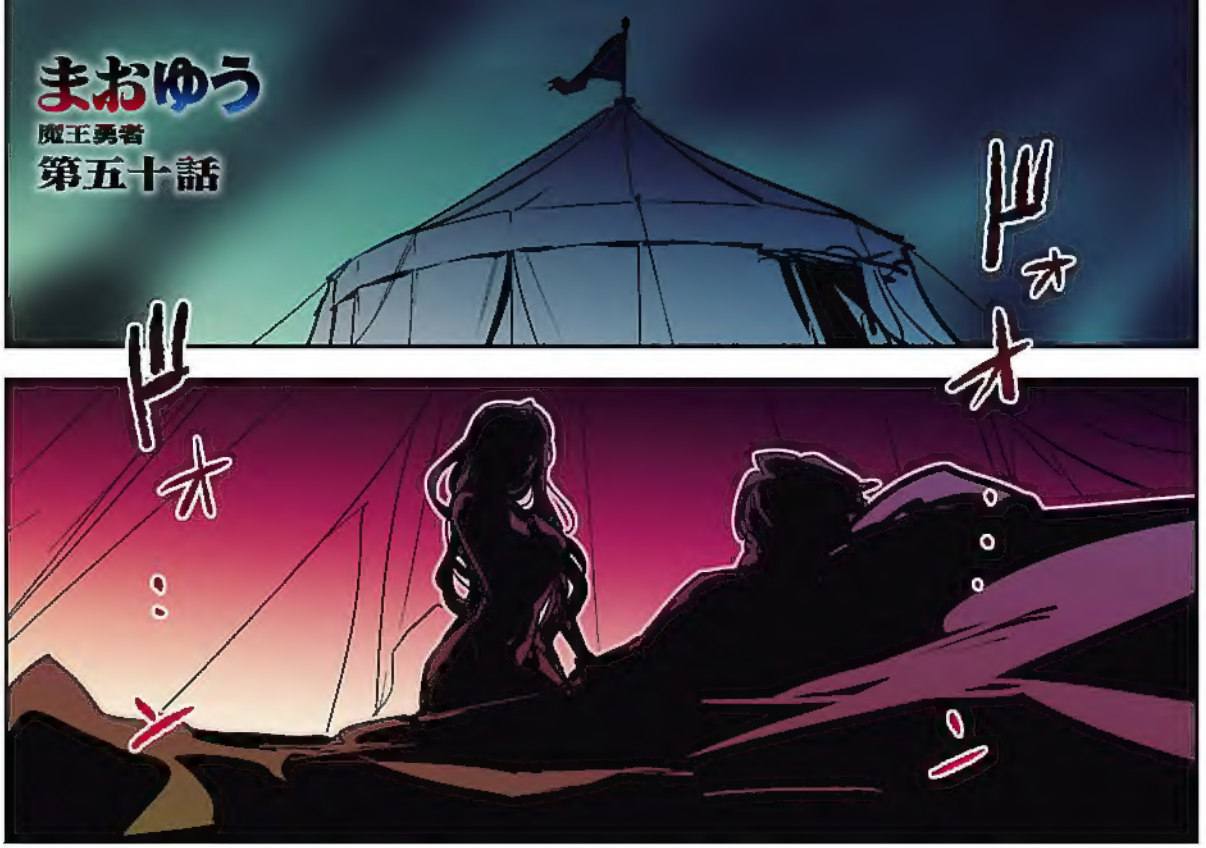
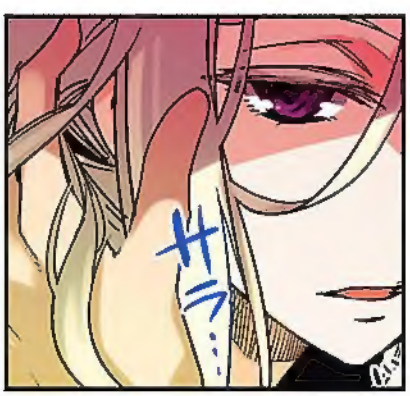
第十六巻
まおゆう
Archenemy and Hero 魔王勇者
――「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」――
原作 石田あきら
漫画 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8
Kadokawa Comics A
まおゆう 魔王勇者


まおゆう
魔王勇者
第五十話
ドォオ
ドォオ

ドォオ

無粋な音
ハ…
そう言うな
兵たちも
夜を徹して
働いているのだ


サラ…

どうしたのです？
なんでもないさ

…ただ
指をすべる
この髪が
美しいなと

髪だけではありません

唇も

胸も

この躰のすべて

貴方さまに捧げられた供物です

お慕い申しておりますわ

灰青王さま

漫画 原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉雷之丞・toi8

魔王と勇者

Archenemy and Hero

——「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」——

第五十話 Archenemy and Hero 50th chapter

答えはひとつ 平和だ

まおゆう
魔王勇者

第十六巻

漫画 石田あきら　原作 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

第五十話 Archenemy and Hero 50th chapter 001
答えはひとつ 平和だ
第五十一話 Archenemy and Hero 51st chapter 055
精霊は欲し給う!
第五十二話 Archenemy and Hero 52nd chapter 113
この開門都市には「終わり」がある

まおゆう魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」

Archenemy and Hero

第十六巻

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ

キャラクター原案
水玉螢之丞・toi8

コラムページ
竹之内大輔（レッカ社）
野村昌隆

まおゆう 第十五巻のあらすじ

Lectures on Archenemy and Hero
Outline of volume.15

「魔王」と「勇者」の劇的な出会いから3年。魔王が「紅の学士」として人間界にもたらした技術や知識により、「冬の国」をはじめとする南部の人々の暮らしは大きく改善された。国力をつけた冬の国と「鉄の国」、「氷の国」の三国は大陸に君臨する「聖王国」や「中央聖光教会」からの自立を果たし、のちには大陸東部の五カ国と七つの独立都市の賛同を得て「南部連合」を結成した。

一方、魔界では魔族の長による大会議「忽鄰塔（クリルタイ）」で発生した魔王暗殺未遂事件をきっかけに、有力氏族長たちの結束が強化。魔王の発案で魔王の権威を預かる「魔族会議」が設置され、地上へ侵攻した蒼魔族への対処や新たに開始された街道の整備事業などを通じ、各氏族間での協力体制が築かれつつあった。その後、勇者の仲介によって「妖精女王」が冬の国を訪れ、魔界の代表として南部連合の中核をなす「冬寂王」らと会談。人間と魔族の停戦、さらには平和条約の締結に向けて新たな一歩を踏み出したのだった。

このように、魔王と勇者がはじめた活動は着実にその実を結びつつあり、世界の変化はおお

むね魔王の予測通りだった。しかし、この過程で魔王が密かに試作させたマスケットが流出。その技術が聖王国に新たな軍政と新兵器・大砲の発明をもたらした。マスケットの量産体制を整えた聖王国は、短期間での兵士育成を可能とするマスケットの特性を生かし、農奴たちを兵士として動員。聖光教会の首長・「大主教」の発令により、30万という未曾有の大軍を擁する「第三次聖鍵遠征軍」を興した。「聖骸」を求めて進軍を開始した遠征軍は、「薬穂ヶ原」での戦いを経て魔界に侵攻。補給地確保に向かった分遣隊5万を除く攻略軍が、魔族と人間が共存する「開門都市」への攻撃を開始した。6万を

動員した魔族軍は、野戦を挑んで半数が壊滅。人間界から帰還した魔王指揮のもと、強固な防壁を利用して籠城戦を開始する。そんななか、5万の兵を率いる南部連合軍が魔界に到着。先行していた「女騎士」の部隊も魔族軍の遊撃隊と合流し、遠征軍の補給拠点を潰し始めた。分遣隊を率いる「王弟元帥」も、「メイド姉」と勇者に阻まれて補給地の確保に失敗。補給が滞った遠征軍は物資の枯渇にあえぎ始めるが、一方の開門都市もまた物資が底を尽きかけていた……。

魔王

「外なる図書館」で得た知識をもとに、世界の変革を目指す魔族の王。魔族と人間、双方の未来のため、現在は開門都市の防衛にあたっている。

メイド長

魔王の側近。彼女の幸せを願い、その夢を叶えるため、手足となって尽力している。

メイド姉

元魔王のメイド。自分の信条に従い、今ひとりの勇者として世界を救おうと決意する。

女魔法使い

元「勇者の一行」のひとり。知識を武器に、勇者の力となるべく独自に行動している。

メイド妹

メイド姉の妹。食いしん坊が高じて料理の道に目覚め、現在は鉄の国で修業中。

冬寂王

冬の国の王。中央と決別したのち、賛同する各国と新たに「南部連合」を結成した。

青年商人

人間界で最大の経済団体「同盟」の幹部。情勢の変化に乗じ、経済面の改革を目指す。

執事

元「勇者の一行」のひとり。冬寂王の執事をつとめつつ、諜報活動なども行っている。

火竜公女

火竜大公の娘で開門都市の魔族代表。都市を守るため、青年商人に助力を求めた。

東の砦将

聖鍵遠征軍の元士官。開門都市の住人からなる衛門族の長として魔族会議に加わった。

女騎士

元「勇者の一行」のひとり。聖鍵遠征軍の物資枯渇を狙い補給拠点を襲撃している。

勇者

魔王とともに歩む青年。女魔法使いから魔王や勇者という存在がもつ本質を聞かされ、新たに判明した破滅の未来を回避するため行動している。

王弟元帥

聖国王の弟。大陸最大の英雄といわれる。聖鍵遠征軍の補給を確保すべく行動中。

百合騎士団長

大主教に仕える百合騎士団の団長。聖光教会の教義と大主教に絶対の忠誠を誓っている。

灰青王

「霧の国」の王。聖鍵遠征軍の前線指揮官として、開門都市攻略部隊を指揮している。

奏楽子弟

「紅の学士」の教えを受けた森歌族の少女。正体をかくして聖鍵遠征軍に同行している。

大主教

「光の精霊」を崇める聖光教会の長。「聖骸」を求めて第三次聖鍵遠征軍を起こした。

土木子弟

「紅の学士」の教えを受けた鬼呼族の青年。開門都市に強固な防壁を築いた。

妖精女王

妖精族の長

碧鋼大将

機怪族の長

蒼魔の刻印王

蒼魔族の長

鬼呼の姫巫女

鬼呼族の長

巨人伯

巨人族の長

銀虎公

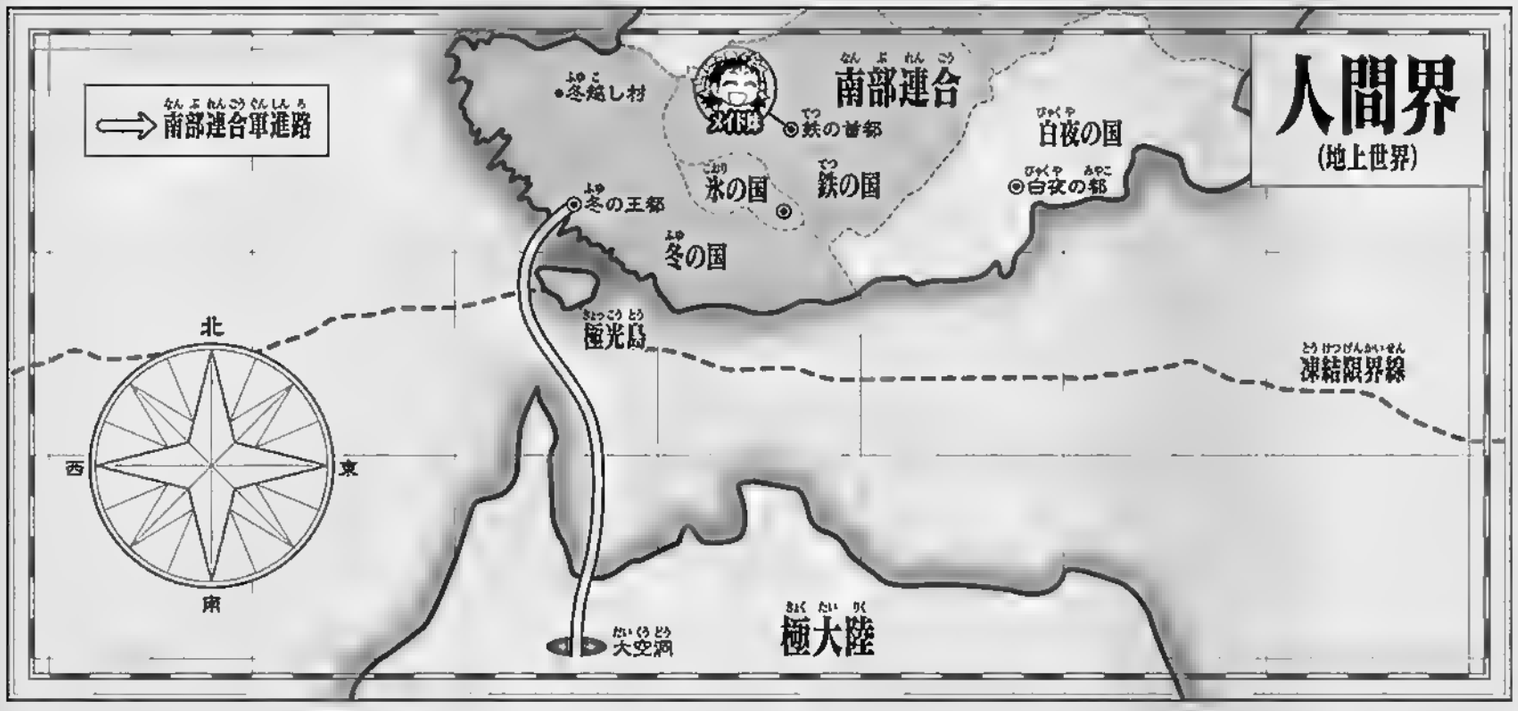
獣牙族の長

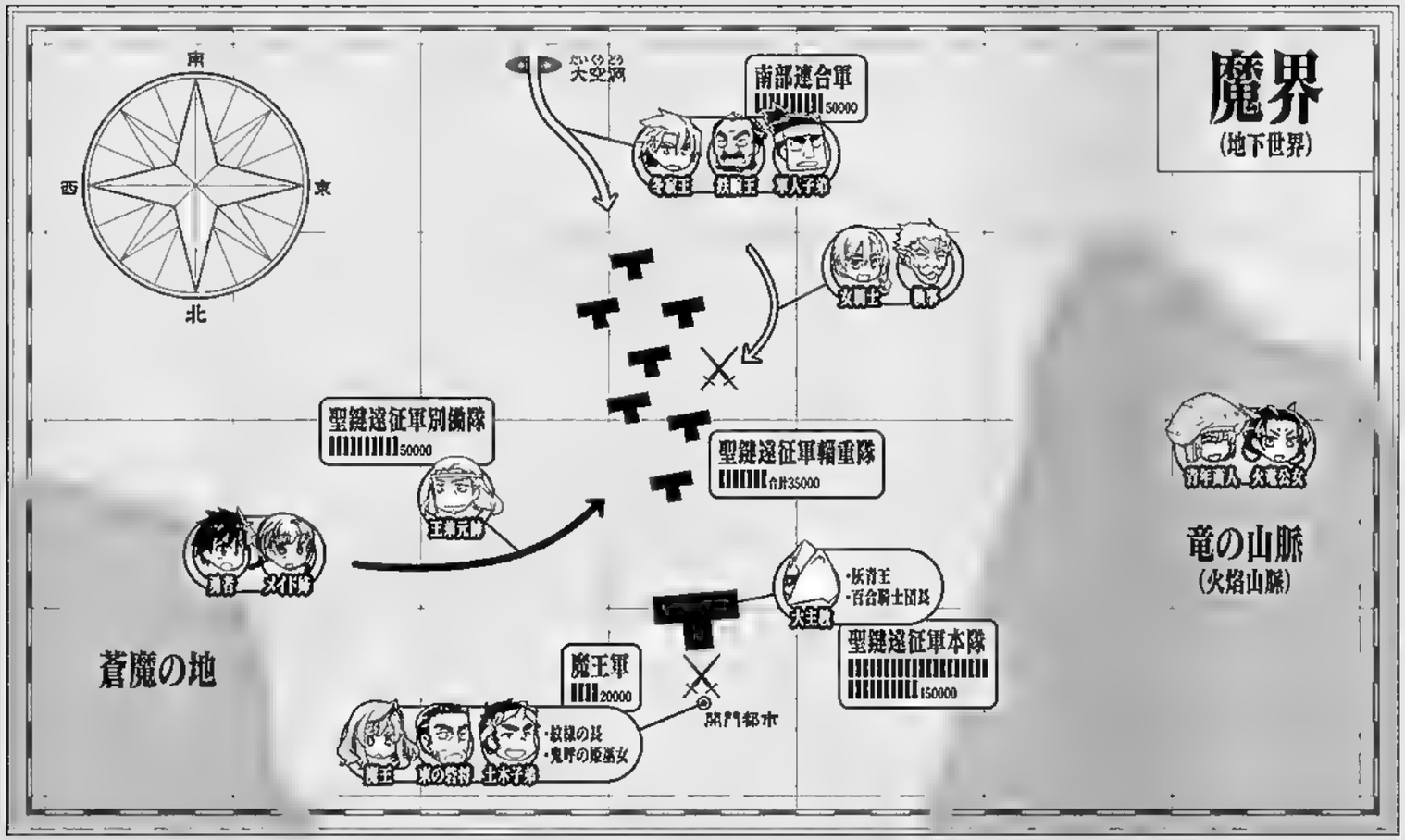
紋様の長

人魔族の長

火竜大公

火竜族の長





まおゆう 主要人物の所在

Lectures on Archenemy and Hero
Location of the Characters

冬寂王　鉄腕王

軍人子弟

南部連合首脳会議の決定を受け、準備を終えた南部連合軍が極大陸へ出発。大空洞を越えて魔界へと入り、現在は開門都市を目指して進軍中。

勇者　メイド姉

メイド姉は機怪族から蒼魔の地の所有権を取得。補給拠点確保に現れた王弟元帥と対峙し、勇者の助力を得て引かせることに成功する。

王弟元帥

遠征軍の後方が脅かされたことを知り、物資を輸送する輜重隊と合流すべく開門都市方面へ移動している。

大主教　・妖青王　・百合騎士団長

妖青王は攻略軍を指揮して開門都市への攻撃を続行。百合騎士団長は妖青王の補佐や大主教の世話をしつつ、信者たちの集会を開いている。

女騎士　執事

女騎士は、魔王が開発したライフルを手に修道院騎士団とともに魔界へ先行。執事とともに遠征軍の輜重隊や補給拠点を次々と襲撃している。途中で獣牙族の残党を率いていた東の砦将の副官と合流している。

魔王　東の砦将

土木子弟　・蚊蝶の長　・鬼畔の姫巫女

魔王が陣頭指揮にあたり、一丸となって都市を防衛中。

青年商人　火竜公女

火竜公女は湖の国から連れ出した青年商人と火焔山脈へ。火竜大公の議長権限で忽鄰塔（クリルタイ）の開催を要請した。

女魔法使い　メイド長

過剰なまでの魔力を蓄えた女魔法使いは魔界のどこかにある「天塔」において、メイド長と共に何らかの準備を行っている。

開門都市をめぐる状況

開門都市に集結した魔族軍は、迫る第三次聖鍵遠征軍に対して攻撃を仕掛け、遠征軍が所持する大量のマスケットやカノーネ砲によって甚大な被害を被ってしまった。現在は都市に籠城して抵抗を続けているが、防壁を修復する資材が底をつきかけている。一方、遠征軍は都市の防壁を崩すべく、連日のように砲撃を行っているが、最新式の防壁を崩すことができず、やはり弾薬が尽きかけていた。開門都市の戦況が膠着するなか、女騎士や執事が遠征軍後方の補給拠点や輜重隊を攻撃。遅れて魔界に到着した南部連合軍も、開門都市へ向けて進軍を続ける。蒼魔の地へ向かった王弟元帥は、糧食の確保に失敗。得られたわずかな物資とともに開門都市へ戻り始めているが、これで遠征軍の物資不足は決定的となる。一方で、青年商人を連れた火竜公女は火焔山脈に転移。火竜大公に忽鄰塔（クリルタイ）の開催を要請した。

茶番だな

すべてを捧げ尽くしましたのに
信じてはくださらないのですか？
女の甘言を信じるようでは王族は務まらぬさ

だが
女のわがままを容れるのも男の器量だ

お前が注ぐ
毒の杯を
飲んでやろう

また…
ですの？
あ
は…
…夜明けは
まだ遠い

いいですわ
なんどでも
なんどでも
お気の済むまで
お仕えしましょう

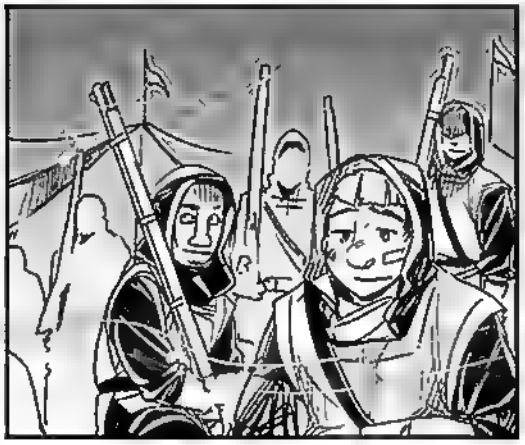
どこからか音楽が…
教会の聖歌…だな

ボソッ
……大嫌いな曲

これって聖歌じゃなかったけぇ？
詩人さんも精霊様の歌を歌えるんだか？

綺麗な曲だよね？
聖王国の教会で覚えたんだけれど大好きだよ
光の精霊様へ春の感謝を捧げる優しい曲だもの

明るくて優しくて
あたしは好きだなぁ



故郷でもこの曲を春の祭りでは踊っただよ
うん
踊るのが目に浮かぶみたい

…帰りたいだなぁ

詩人さんは
魔族なのに
怖くないだなあ
あたしは
妖精族
戦争には
向かない
華奢な種族
なんだよ
魔族といっても
いろいろ
あるんだよ

タダイマー
ご苦労さまでござる

コッチヲ監視シテル
アヤシイ部隊イタヨ！

偵察部隊でござるな
おそらく王弟元帥の子飼いの兵でござろう
妖精さんに斥候を頼んでいるんですか？
ゴゼル！

妖精族特に小さき羽妖精族は
月の光でも見通すほどの夜目を持ち
気配を隠すこともできる優秀な斥候なのでござる

おそらく拙者たちは
その王弟元帥軍五万と矛を交えることになるでござる

マスケットが充分に揃っている上に
士気や練度は遠征軍の中でも最上級の軍が五万
通常の貴族軍一〇万に匹敵する力を持つでござろうね
それに比べて拙者たち南部の連合軍はその総数五万
数だけは同程度でも普通に戦えば敗北は必至

では 我が軍の行軍にいろいろと変化があるのは…
そう
数的不利をごまかす工夫でござる
行軍陣形や部隊の頻繁な入れ替えを行い
行軍の速度に緩急をつけて軍の総数を相手に悟られないようしているでござる

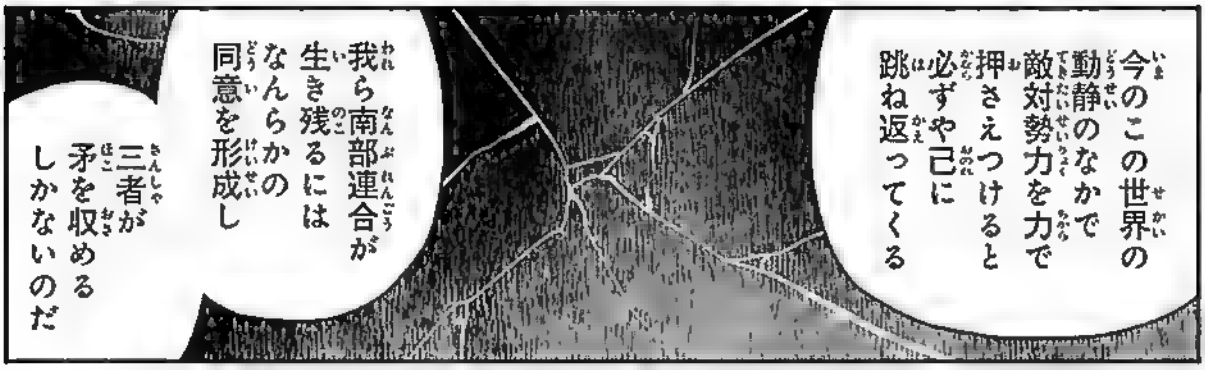
われら連合軍は精鋭なれど五万
聖鍵遠征軍全軍二〇万以上を引き受けて戦える規模ではない
それどころか王弟元帥率いる五万すら相手取るとなれば厳しいでござろう?
少なくとも戦いの主導権は握らないと手出しはできないでござる

それは
王弟元帥が
聖鍵遠征軍の
首脳部のひとりで
あるからだよ

やはり王弟元帥との
衝突は避けられぬ
でござろう
…なぜですか？
勝つのは難しいと
今 おっしゃった
ばかりじゃないですか？

この遠征は
聖鍵遠征軍を
打倒するため
ではない

地下世界
中央の国家
そして我ら
南部連合
この三つが
滅びぬように 政治的
決着地点を探るのが
その目的なのだ


今のこの世界の
動静のなかで
敵対勢力を力で
押さえつけると
必ずや己に
跳ね返ってくる
我ら南部連合が
生き残るには
なんらかの
同意を形成し
三者が
矛を収める
しかないのだ

——しかし
そう「しかし」だろうな
あれだけの軍を出すのだ 金も使っただろう 無茶もした
連中は手土産なしで「はいわかりました」と帰るわけにはいかないだろう
だから少なくとも一戦はする必要がある
…方向性としてはふたつ
ひとつは王弟元帥の軍が反転して拙者たちと交戦に入るか
もうひとつは王弟元帥軍は一度本隊に合流
こちらに対しても防御的な陣を布いてにらみ合いになる形ですね
拙者は最終的に後者を想定しているでござるが
その前に一度王弟元帥とは矛を交える必要を感じているでござる

師匠が近くにいるはずでござるからね

そのへんを考慮に入れないと

今回の戦では陣地の構築速度が生死を分かつことになるかと

そのための準備はしてあるでござる

では羽妖精殿

引き続き斥候の指揮をお願いするでござる

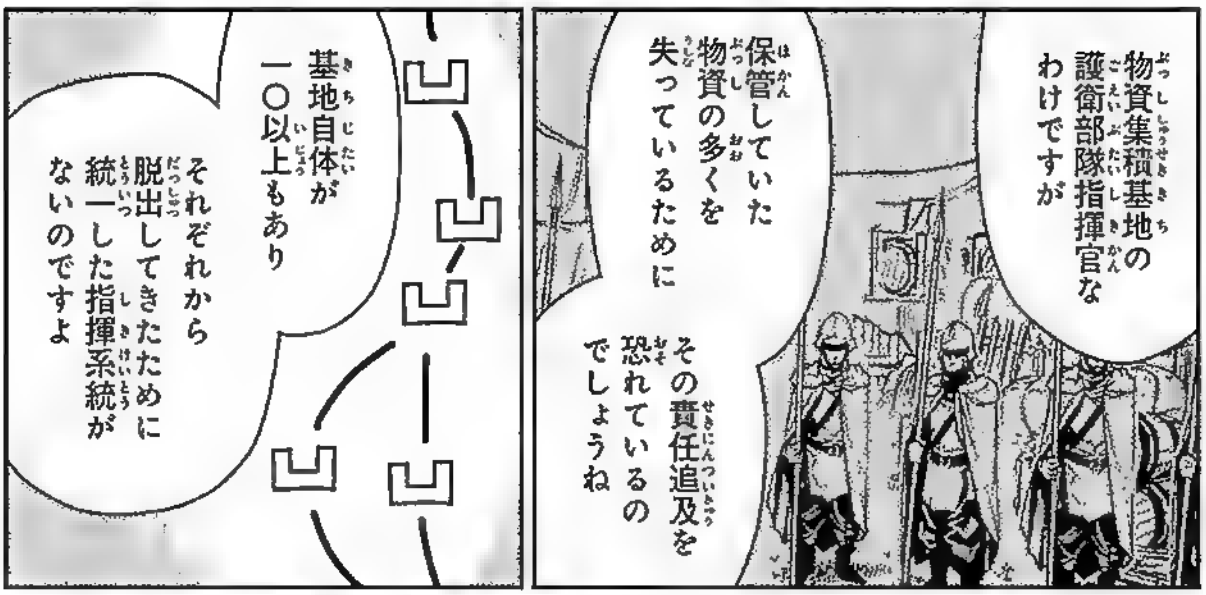
ワカッタンダヨー！

そろそろ輜重部隊が見えてくるはずです

何も起きずに合流できるようですね

…だといいがな

…そろそろ部隊先頭は接触
先方指揮官との会談も予定させておりますが
どうした？
いえ
どうも渋っているようで


物資集積基地の護衛部隊指揮官なわけですが
保管していた物資の多くを失っているために
その責任追及を恐れているのでしょうね
基地自体が一〇以上もあり
それぞれから脱出してきたために統一した指揮系統がないのですよ

処分は当たり前のことだ
しかし
一方的に責めるわけにもゆくまい
一か所につき二〇〇〇程度の守備隊だ
南部連合軍五〇〇〇〇にかなうはずもない
いえ
彼らを叩いたのは人間と魔族の混成部隊 数千だというのです
混成部隊？

湖畔騎士団の紋章が
見えたという報告も
ありますが
歩兵主力は
確かに魔族
だったと

さらにいえば
敵はマスケットも
装備していたと
いう話です

マスケット？
…奪った
兵器を使い回して
いるのか
おそらく
そうでしょうね

詳しい話は
合流後 あらためて
聴取することに
なるでしょうが…

!?

敵襲！
敵襲！！

騎兵の突撃だ！
マスケット部隊は展開
右翼からだ
備えよ

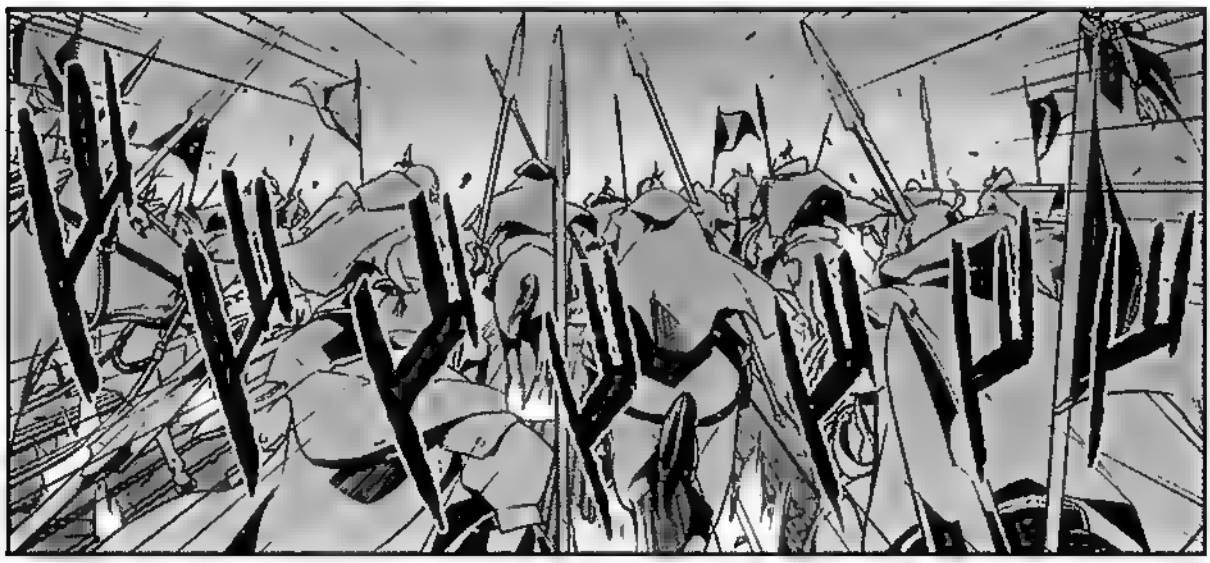
左翼からも
うわぁぁ!!

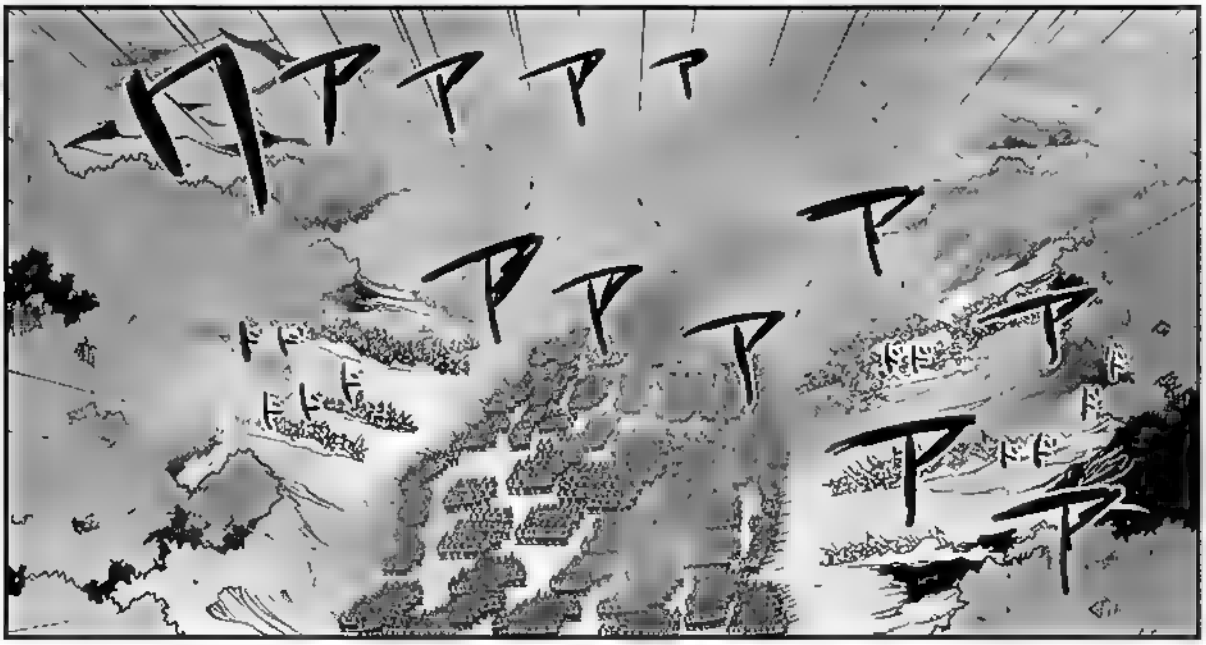
奇襲か!?

どこの軍だというのだ
南部連合は動いてないはずだぞ

落ち着け！
敵は少数だ
索敵を信じろ！
そんなに多数の軍勢が忍び寄ってきて気がつかないはずはない！
敵は森林部に潜んでいた
多くとも一万には届かぬ小部隊だ！
おお…

足を止めるな
前方に突破をかける




アアアア

心当たりが？
前の聖鍵遠征軍…
指揮官が負傷した軍の
指揮を 勇者一行に
任せたことがあった
士気の向上を
期待しての措置だったが
騎兵団の操り方は
まさに神業であった
指揮をとっていたのは
勇者ではなかったがな
……！
ではあの……！
騎兵の正面から
ぶつかるな！
受け流して
取り囲むのだ
止まったら
マスケットを見舞え
オオ
オオ
オー

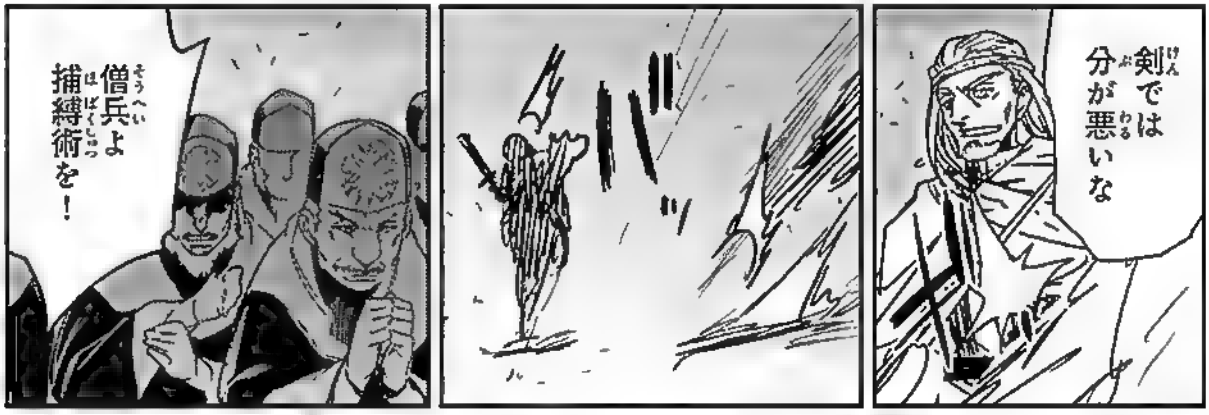
だめです
森のなかから
飛び出してきた
魔族兵士の突破力が
予想以上です
乱戦になり
マスケットが
機能していません
マスケットを
下げろ！
長槍兵を
押し出せ！
長槍兵
前進せよ！

魔族を押し戻せ！
精霊は欲し給う！
精霊は欲し給う！

数は少ない！
受け流せ！
勢いを殺せ！
王弟
元帥!!

南部連合の女将軍！
極光島の白薔薇！
勇者の右の翼!!
そう呼んでもらえるとは光栄だな
王弟元帥
いや
聖王国の英雄
大陸最大の指導者
…何を求める
なにゆえ我々と闘うのだ
わかっていることを訊くな
精霊の使徒として答えはひとつ
平和だ

平和だと？
それが可能だと？
不可能だったらどうした!?
そんなことが私が力を尽くさない理由になるものか!!


剣では分が悪いな
僧兵よ捕縛術を！

キュオオ
アアア
祈禱で出し抜かれるわけには——
いかないな

当たらぬか
――直接狙うな！
周辺の空間ごとマスケットの弾を置きに行け!!
撃てぇ！
反応が早い
どっかの魔族将軍よりよほど
大丈夫ですか閣下!?
大事ない

——ここまでか

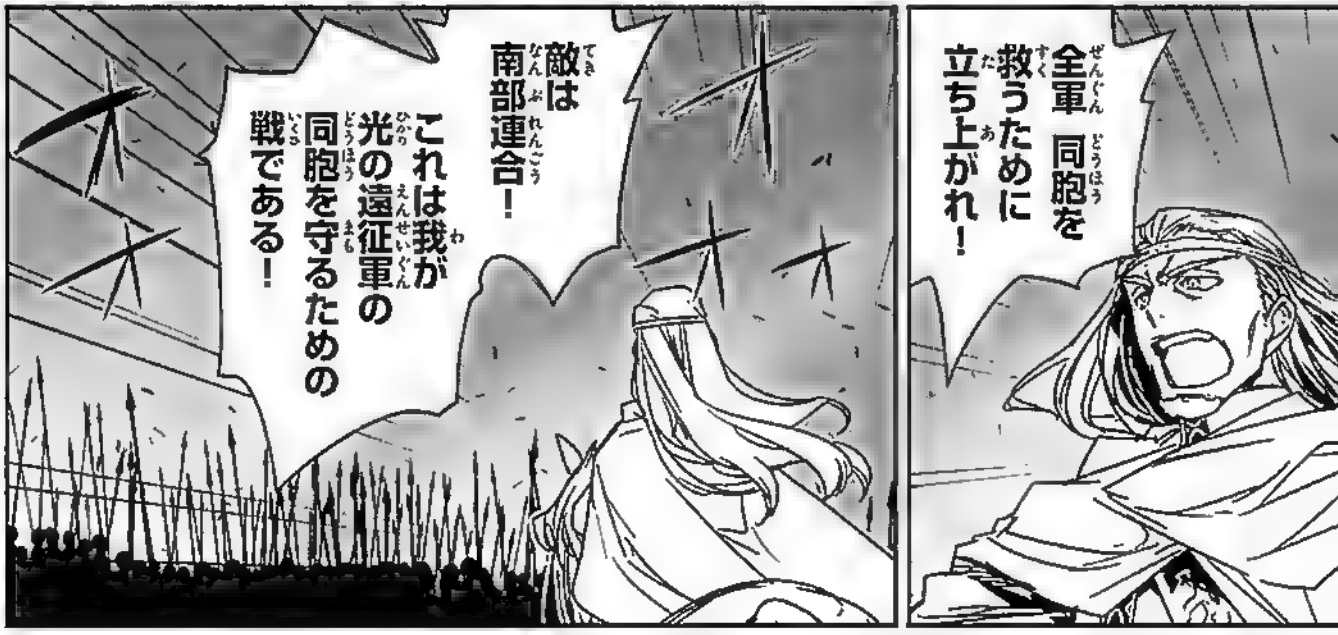
騎士団展開！
離脱せよ！

退くか
女騎士

この場は
…持ち越しだ
王弟元帥！

奇襲部隊
まっすぐに
輜重部隊へと
突進してゆきます
我が方は
マスケット部隊を
中心に 追撃のため
突出
南部軍
輜重部隊
奇襲部隊
王弟軍
突出させては
敵の思う壺だ
引き返させろ
制止が
利きません
少数による奇襲に
指揮系統が完全に
揺さぶられました
下士官を中心に
指令系統に
戦死者が多く
特にマスケットに
よると思われる
銃創です
チッ
どうやら こちらの
指揮を寸断する
目的で攻撃を
加えてきたな
まずは一手
とられたか

閣下
このままでは
輜重部隊が
しかし
それも敵の
誘いかと…
わかっている
だが
乗らずば
二万の友軍を
失うことになる
このまま進軍し
会戦に入る

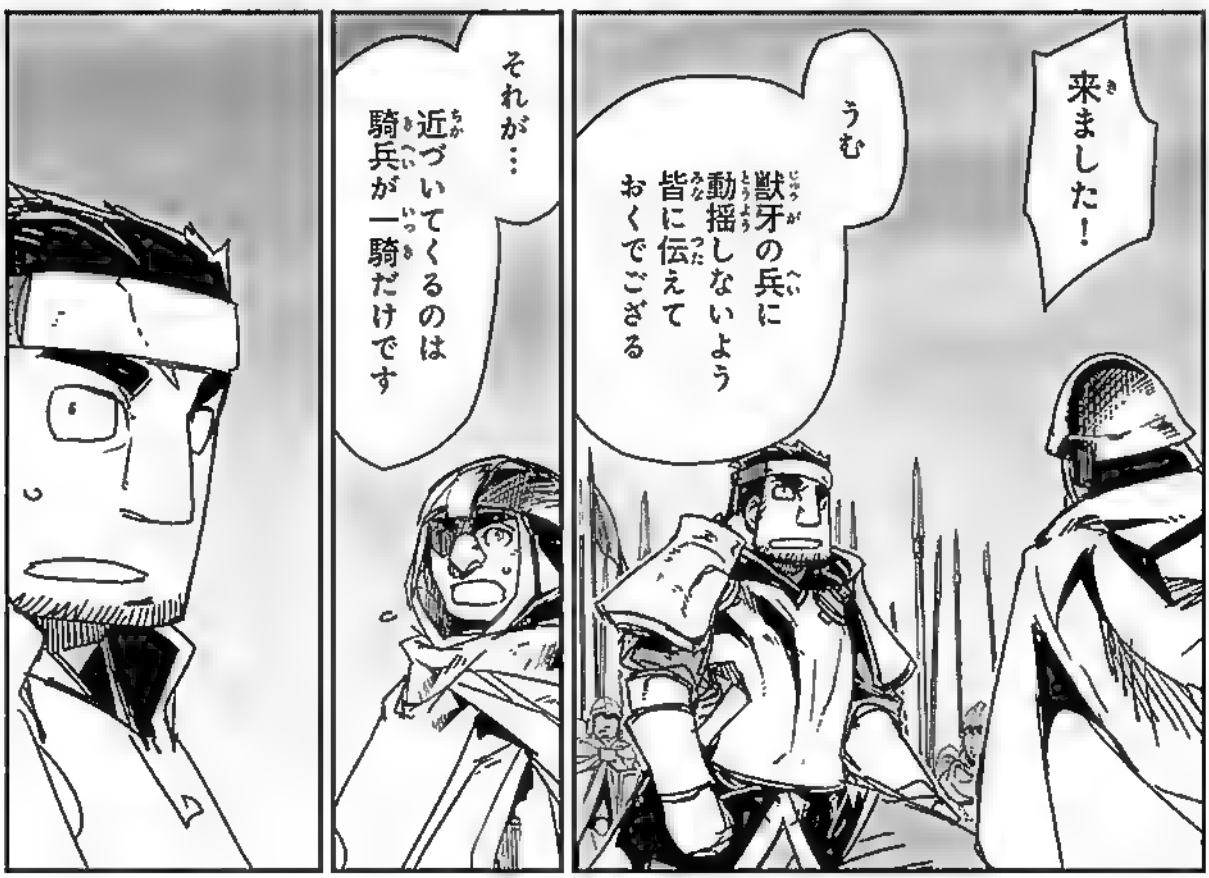

全軍 同胞を
救うために
立ち上がれ！
敵は
南部連合！
これは我が
光の遠征軍の
同胞を守るための
戦である！

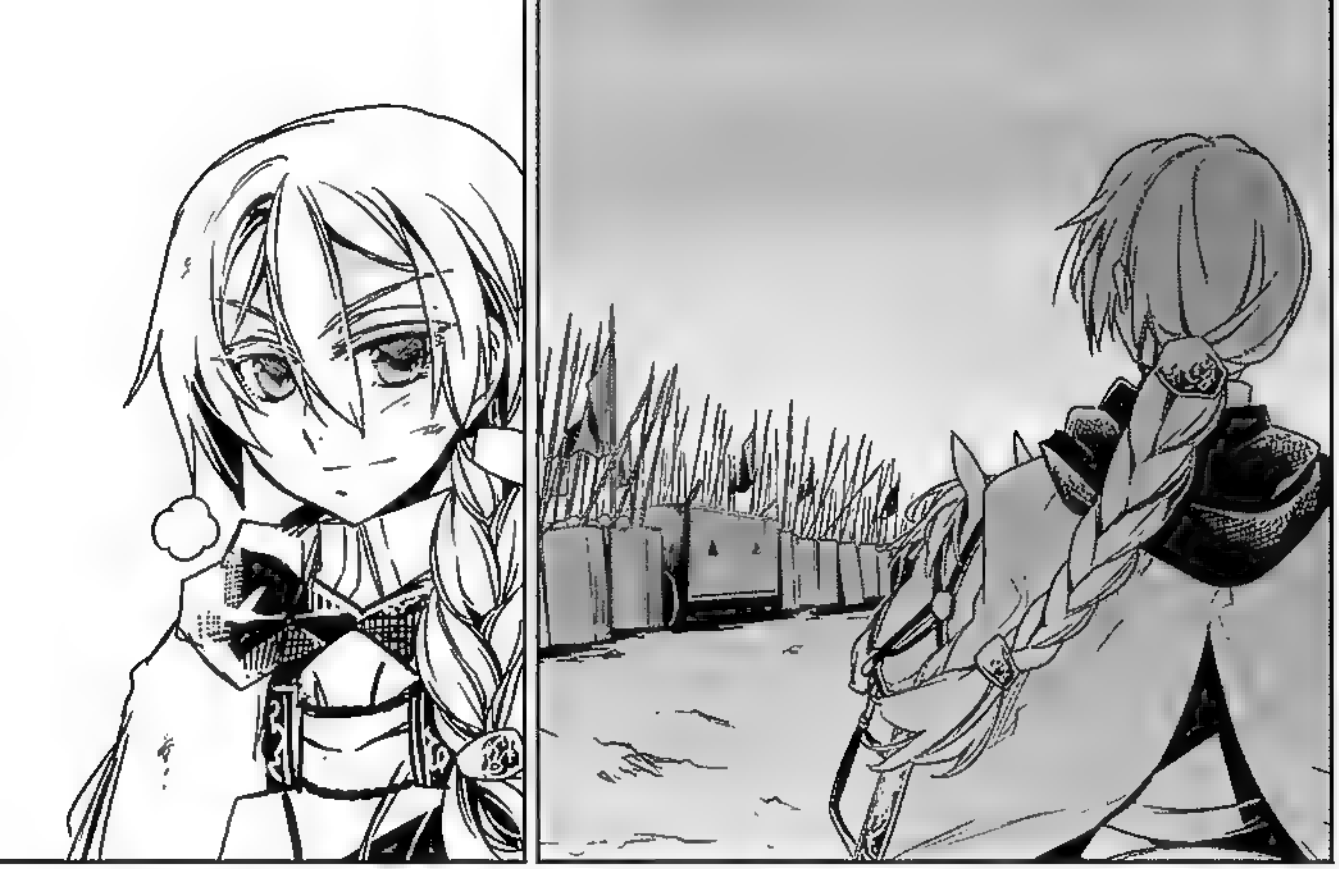
タイヘン！
大変！

王弟サンノ軍ガ
乱レテコチラニ
向カッテクルヨ
変ナ部隊ガ
追ワレテ逃ゲテル
なんだと!?
変な部隊？

半分騎馬ノ人間デ
半分徒歩ノ獣牙族
ヘンテコ同A
騎士師匠でござるね
騎士師匠…？
…姫将軍ですか!?
交戦準備
騎士は騎乗！
走行車両を前に押し出すでござるよ
急ぐでござる
ガラガラガラ

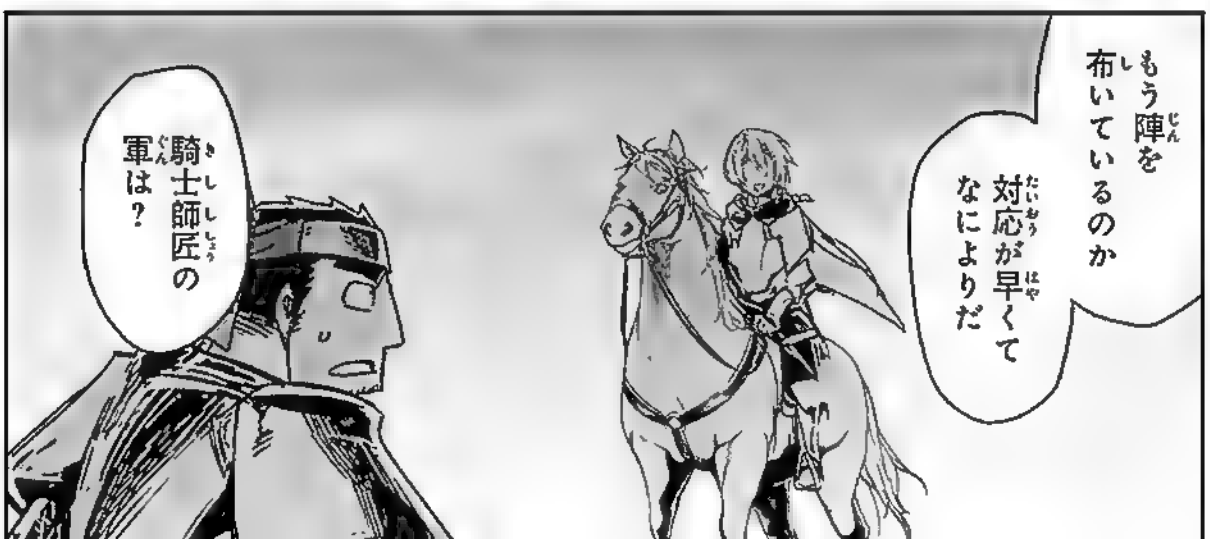
クルヨ
クルヨ
逃ゲテクルヨ！
逃げてるのでは
ござらん
おそらくは
誘っているので
ござる…

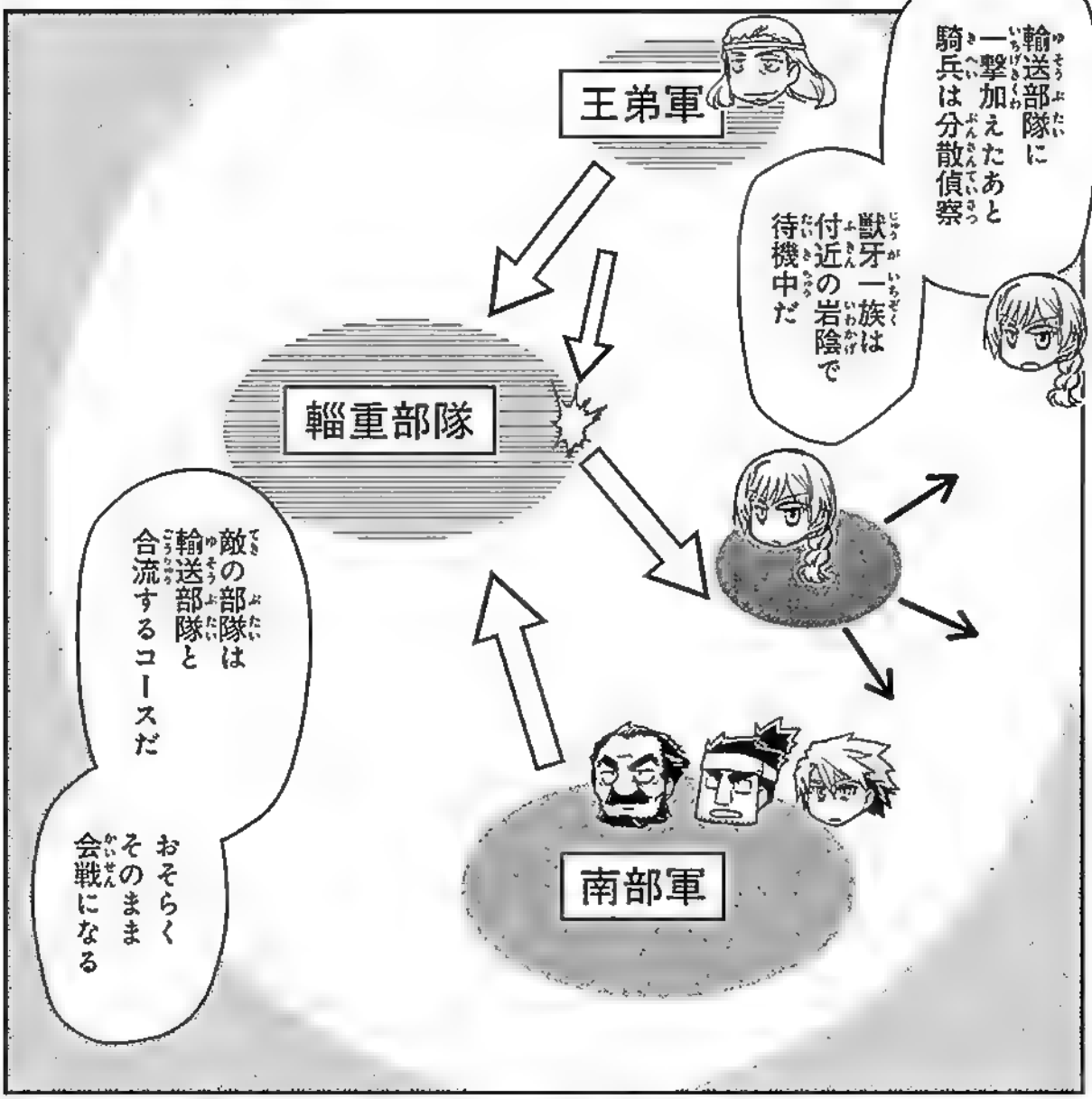

来ました！
うむ
獣牙の兵に
動揺しないよう
皆に伝えて
おくでござる
それが…
近づいてくるのは
騎兵が一騎だけです



軍人子弟！

騎士師匠！
そうだと思ってござった！


もう陣を布いているのか
対応が早くてなによりだ
騎士師匠の軍は？


王弟軍
輸送部隊に一撃加えたあと騎兵は分散偵察
獣牙一族は付近の岩陰で待機中だ
輜重部隊
敵の部隊は輸送部隊と合流するコースだ
おそらくそのまま会戦になる
南部軍

――王弟元帥と剣を交えたぞ

強い
聡い
そして苛烈だ

…どうでござった？
死力を尽くさないとだめだ

――私の部下も少なくない数が討たれたはずだ
でも戦うのなら今がチャンスだ

王弟元帥は強い
その真意を確認するためには
遠征軍本隊と合流させる前にぶつかる必要があると私は考える

同感でござる

では
行くか
了解で
ござるよ
騎士師匠！

指揮官！
指揮官は
いるか!?
この輜重部隊を
統括する
指揮官を呼べ

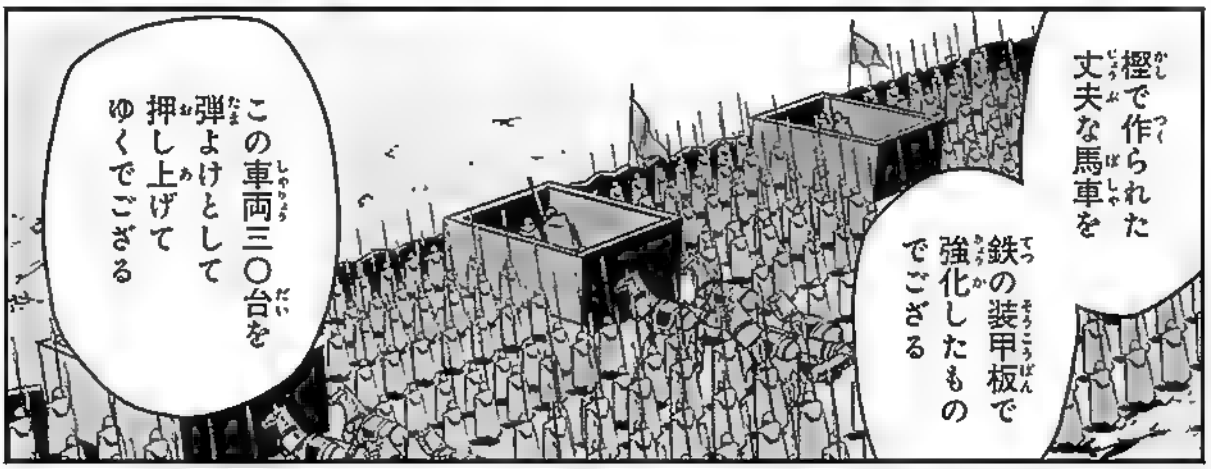
申し訳
ありません
私が知るかぎり
その役職はおりません
バカな
それでは
烏合の衆
ではないか

輜重部隊は
このまま前進
遠征軍本隊へと
合流を果たすのだ
ハッ
はひ！

もはや
視認距離に
南部連合が
見えます
あの陣は
見たことのない
奇妙なものですな
ああ
馬車を前面に
出すとは

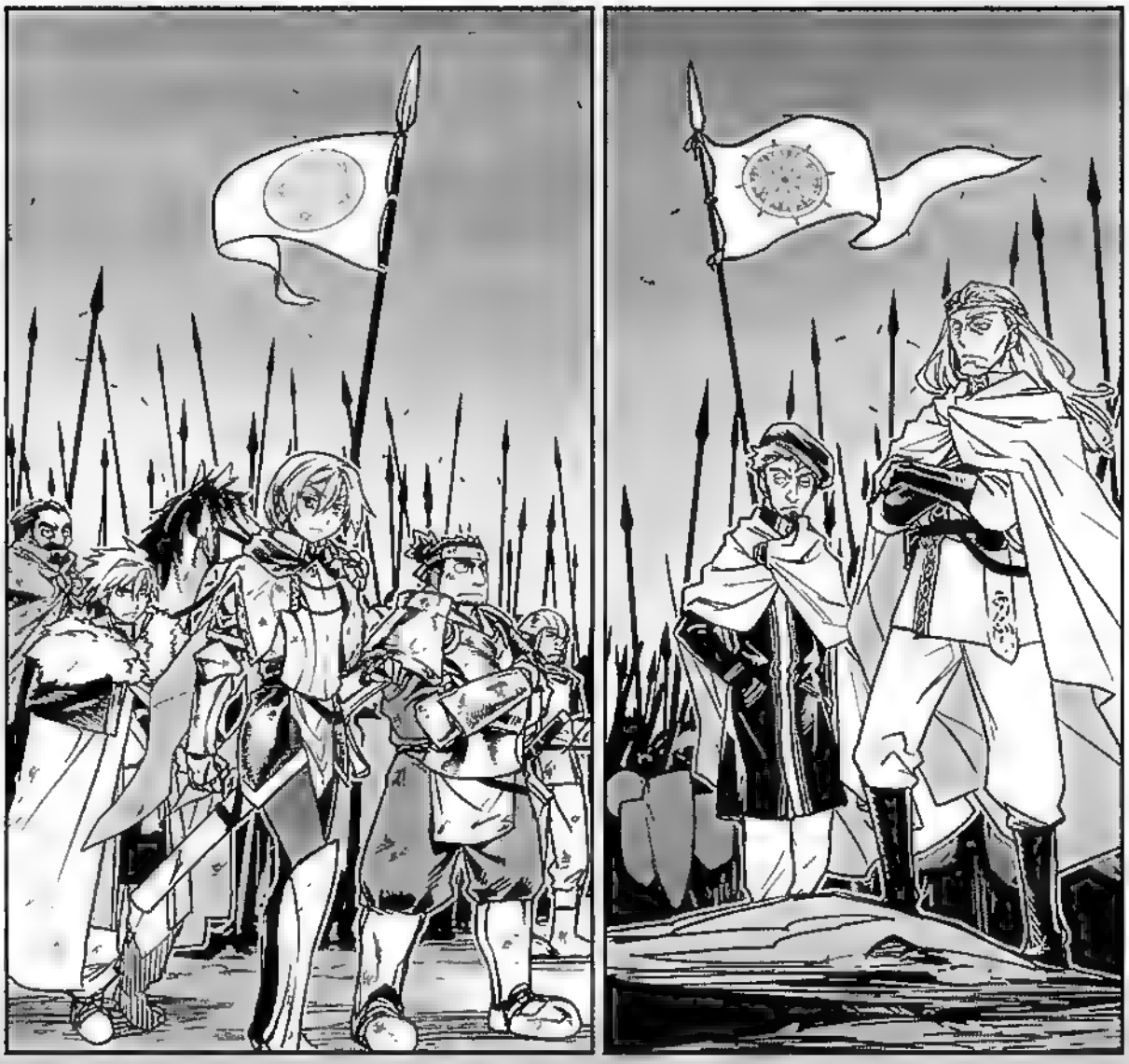
どうやら 敵も
マスケットを
入手したようだな
あの馬車は
おそらく 銃兵の
安全を確保する
ためのものだ
マスケット兵は
その攻撃力に比べて
防御力は弱い

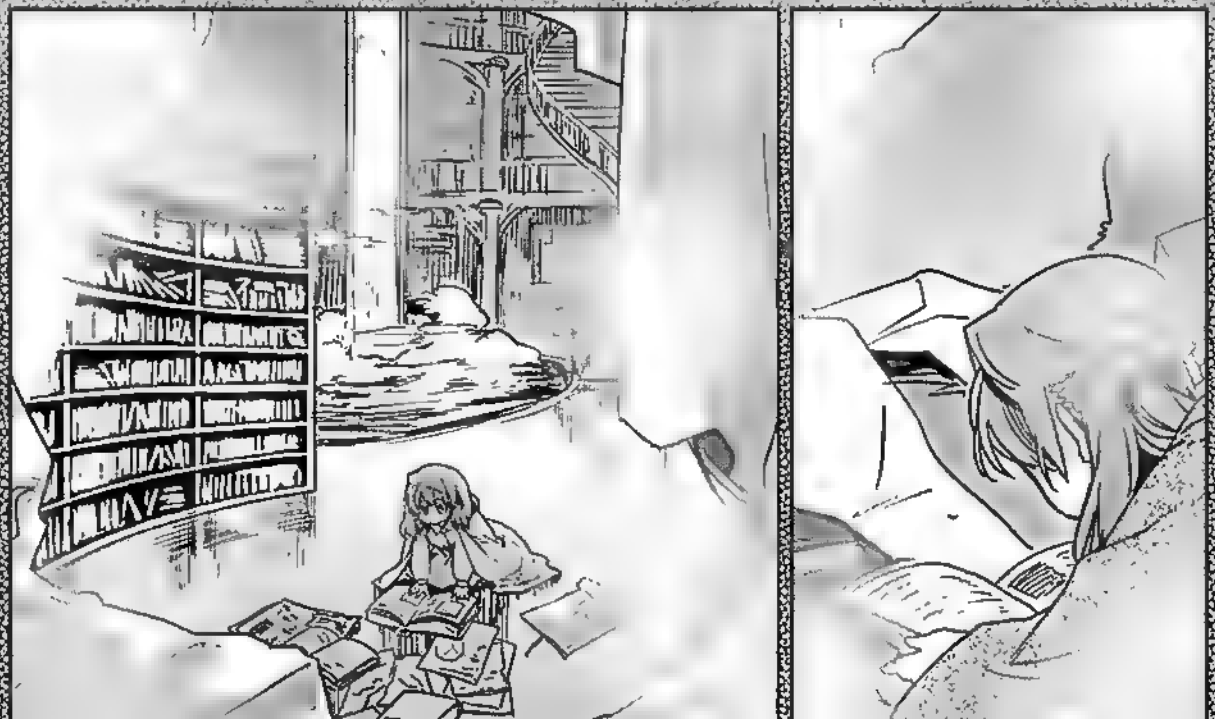
――アレは？
堡塁と車両の両方を兼ね備えた策でござるよ

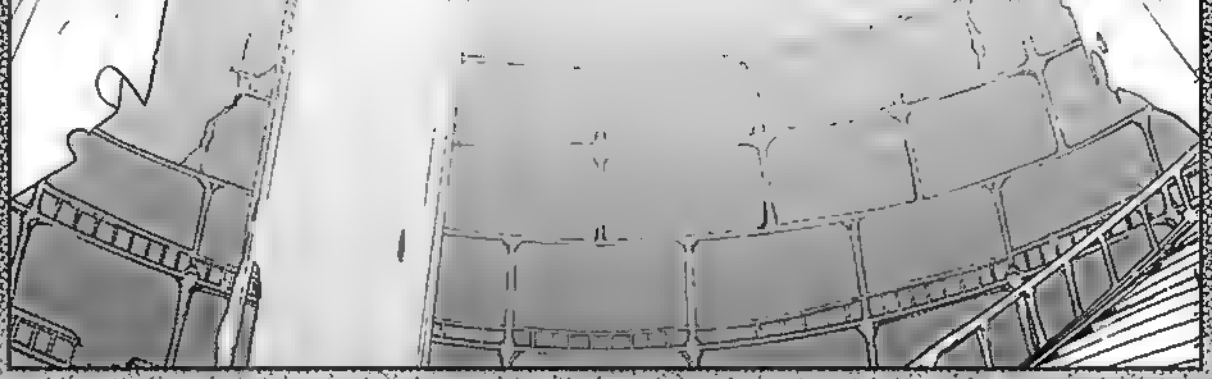

樫で作られた丈夫な馬車を
鉄の装甲板で強化したものでござる
この車両三〇台を弾よけとして押し上げてゆくでござる

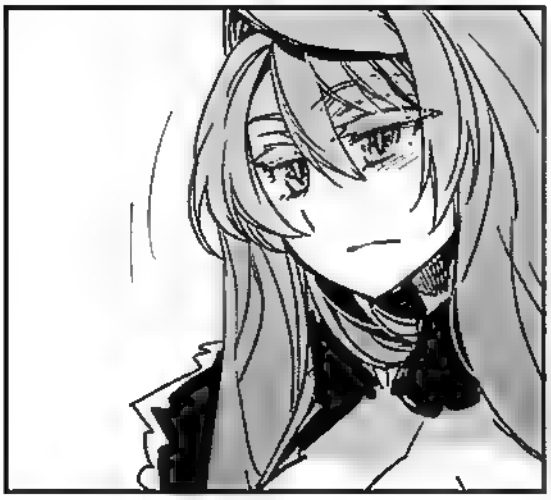
考えたじゃないか

師匠仕込みでござるからな





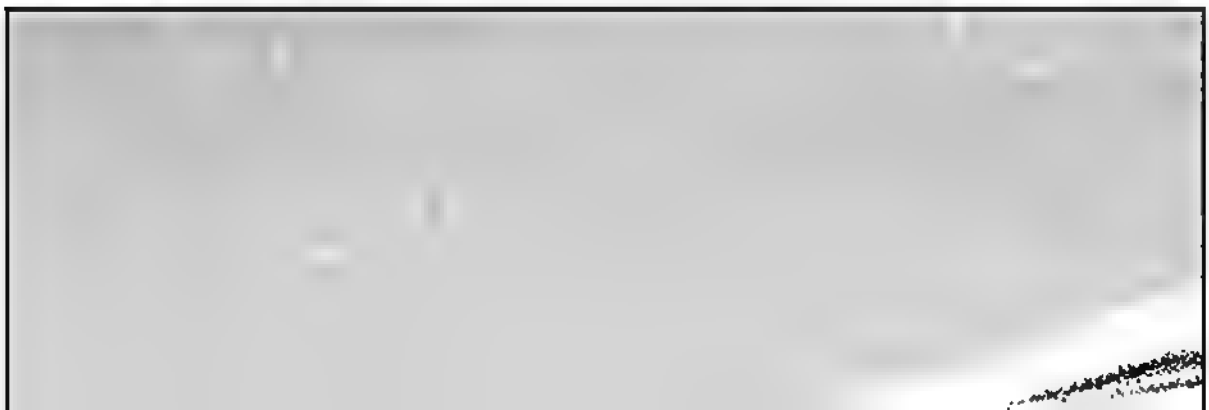




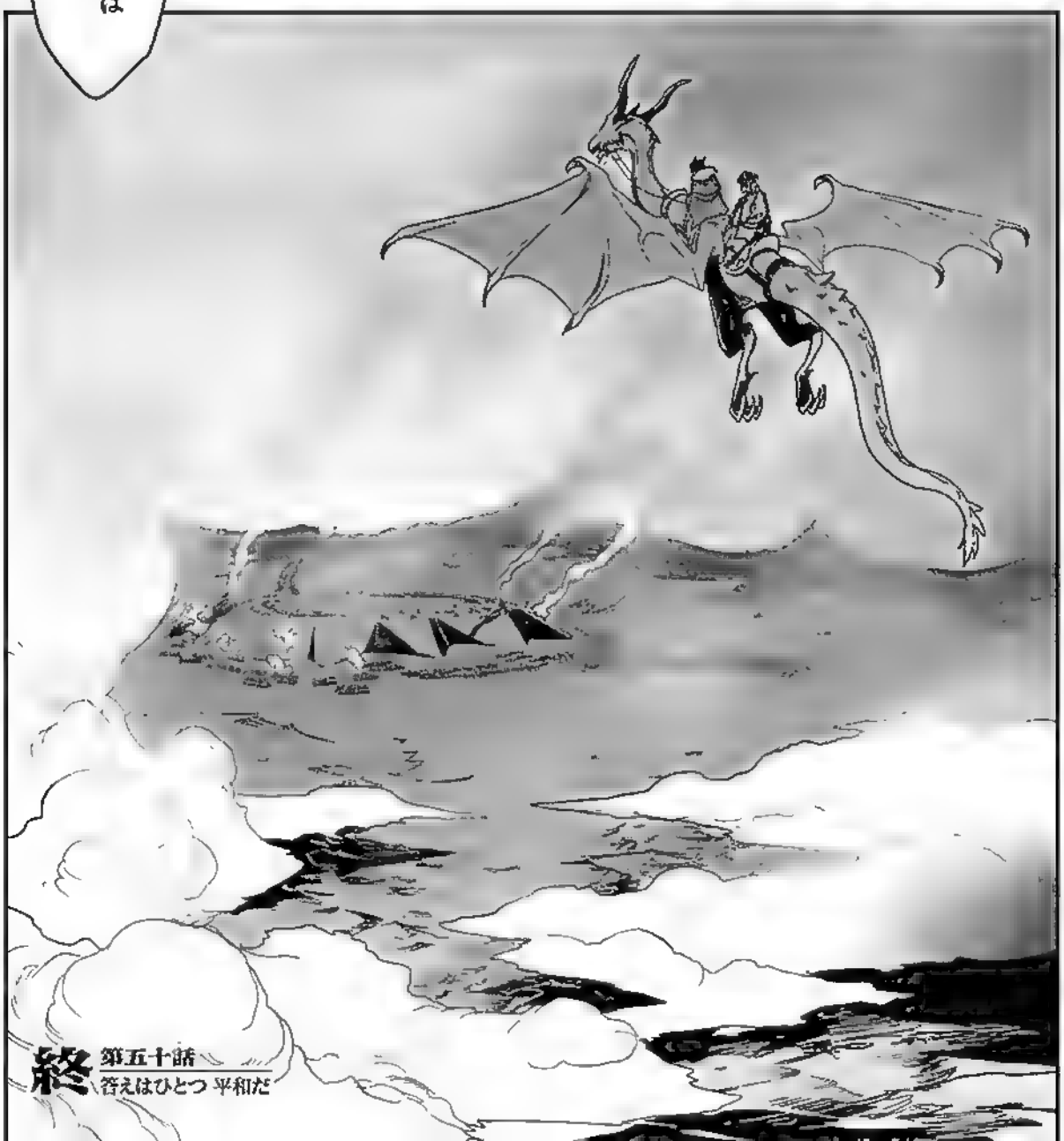
絶対
この都市は
落とさせない
この都市が落ちたら
きっと魔族も人間も
退くに退けなくなる
だから 勇者は
来ないほうが
いいんだ
…ここに来たら
あの祭壇を
見てしまう

私は勇者と戦いたくなんてない
勇者と戦うくらいなら——いい
勇者がいなくてもガマンする
…でも
会いたいな
勇者

会いたいぞ…



開門都市はもうすぐです
大丈夫かや
なんとか…
これもすごい乗り心地ですね



終 第五十話 答えはひとつ 平和だ

第四十八回

斥候について

**戦時に限らず平時においても
情報の重要さは変わらない。
その情報を集める斥候は軍で
もっとも重要なもののひとつだ。**

斥候は敵に発見されて撃破される可能性もある。情報収集だけなら隠密行動が可能な者がもっとも適任だ。

斥候の役割と重要性

戦争において、情報収集はとても重要になる。戦場となる地形や敵の規模がわからなければ有効な部隊編成はできないし、敵がどこに向かうのかがわからなければ対処もできない。これをひと言で言い表しているのが、中国の兵法書『孫子』に記された「敵を知り己を知れば百戦危うからず」という有名な言葉。敵味方の情勢をしっかり把握していれば、１００回戦っても負けることはないという意味で、『孫子』が記されたのは紀元前だというから、いかに古くから情報が重視されていたのかがわかるだろう。そして、軍の部隊において情報を集める役目を負うのが斥候だ。

斥候は戦闘部隊の前衛に配置され、本隊の移動に先駆けてあらかじめ進軍先の状況を把握することが求められる。地形の情報や敵の位置を探ったり、後退する敵部隊を追跡して報告するだけでなく、ときには遭遇した敵の斥候部隊と戦ったり、敵の部隊編成や対応力を調べる目的で、限定的な戦闘をしかけることもある。

現代では、航空機やヘリコプターなどによる空中からの偵察も行われている。ただ、隠蔽されている待ち伏せの部隊は発見しにくいといったこともあり、車両や歩兵の斥候もまだまだ欠かせないようだ。

また、極めて重要な局面では、将校クラスの人員が直接偵察に出ることもある。部隊を指揮する将軍自身が直接現場を目にすることで、素早く対応ができるからだ。とくに、将官の育成システムがそれほど整っていない時代では、戦争は将軍個人の才覚に頼るところも大きい。他人の報告から作戦を練るよりも、直接見て考えたほうがより正確で手っ取り早かったのだろう。現代の戦争ではまずないことだが、かつてヨーロッパを席巻したナポレオンは、総大将である自ら最前線に出て指揮をとったことが何度かあったという。

なお、情報が重要なのは戦争だけでなく、企業間の競争でも欠かせない。企業の機密情報を外部に持ち出す産業スパイは、ある意味斥候ともいえるだろう。

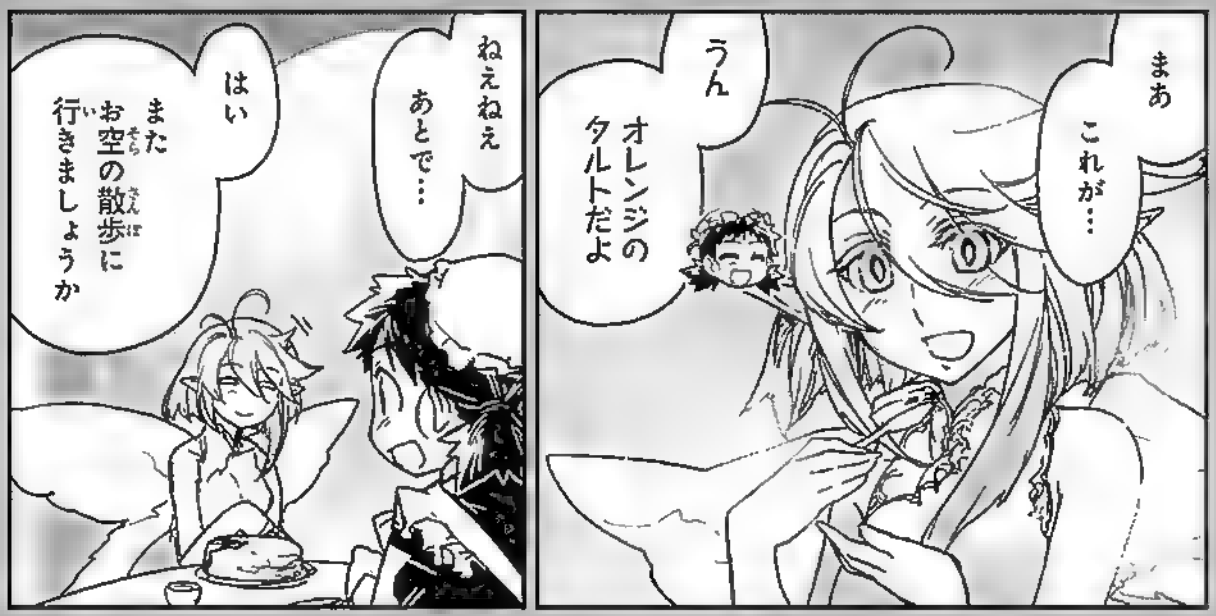
世界的に見て日本は罰則が緩かったが、法律が見直されて厳罰化された。情報というものは、それだけ価値あるものなのだ。

斥候を出してくるのは敵も同じ。敵の偵察を前提として、実態を悟られないよう工夫することも必要になる。

日だまりの中で

ああ
そうだ
そっちの資材はゲートまで
残りは魔界の前線まで…
やはり聖鍵遠征軍との交戦は分が悪いか…

冬寂王…
軍人子弟…
無事でいてくれよ


まあ
これが…
うん
オレンジのタルトだよ
ねえねえ
あとで…
はい
またお空の散歩に行きましょうか

うふふ
よし、
がんばるや！

まおゆう
魔王勇者
第五十一話

剣技や魔法はどのように身につけたのですか？
興味があるな

勇者の剣は一見めちゃくちゃだが
よくよく見るとあるかなきかの品というか
本格的な型があるように見える
剣はまだしも魔術はある種の学問ですから
我流で身につけるわけにもいかないでしょう？

…んー
？

第五十一話 Archenemy and Hero 51st chapter

精霊は欲し給う!

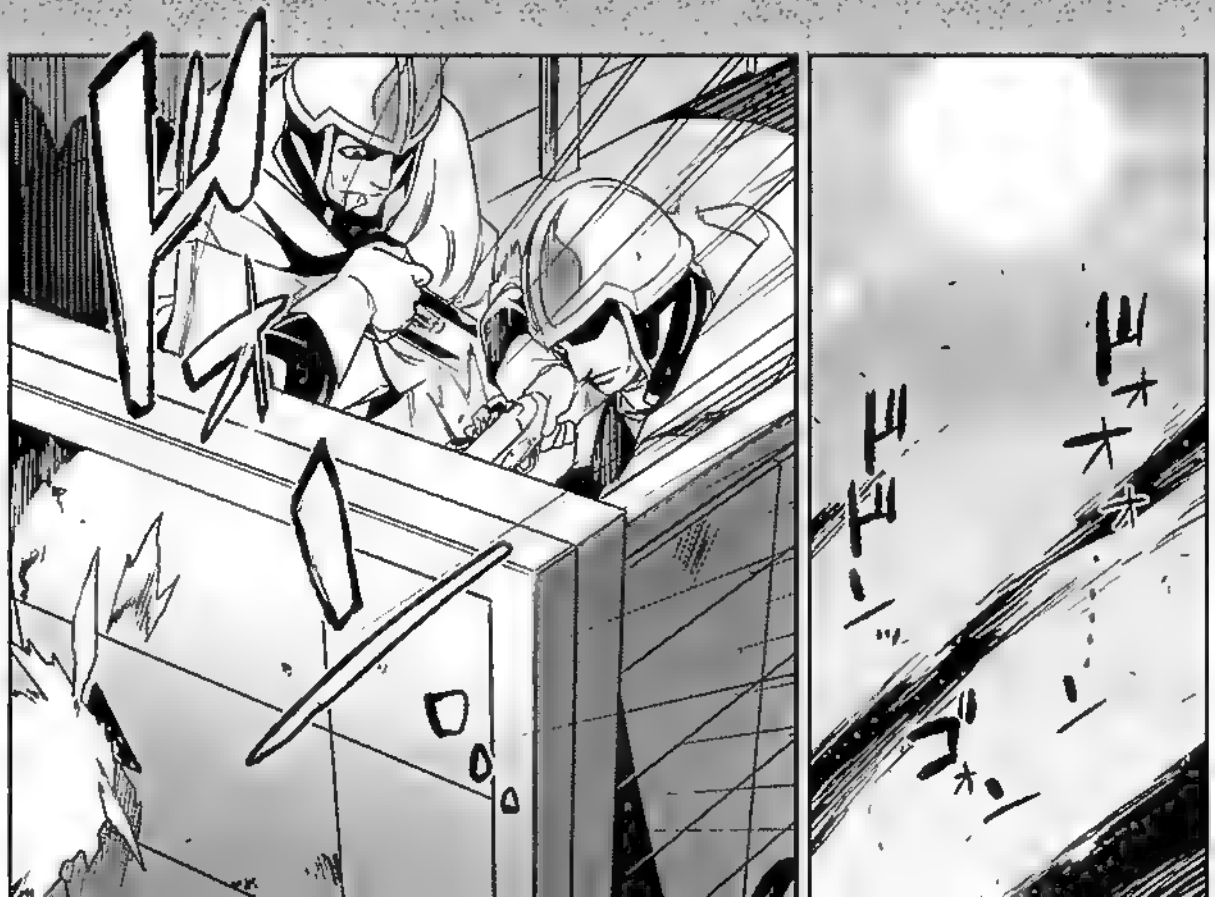
…また失敗してしまったかな
そんなことはないでしょう
勇者聞かれたくなかったんじゃないかな
それでもよいのではないでしょうか
世のなかには本人は尋ねられたくないことでも
尋ねたほうがよいこともあると思うのです
？
どういうことだ？
…古い
…古い思い出は時に取り出して
空気に当てて埃を払う必要がある
たとえ痛くても
自分がどこに立っているか思い出すために
おぎゃあ
ぎゃあ

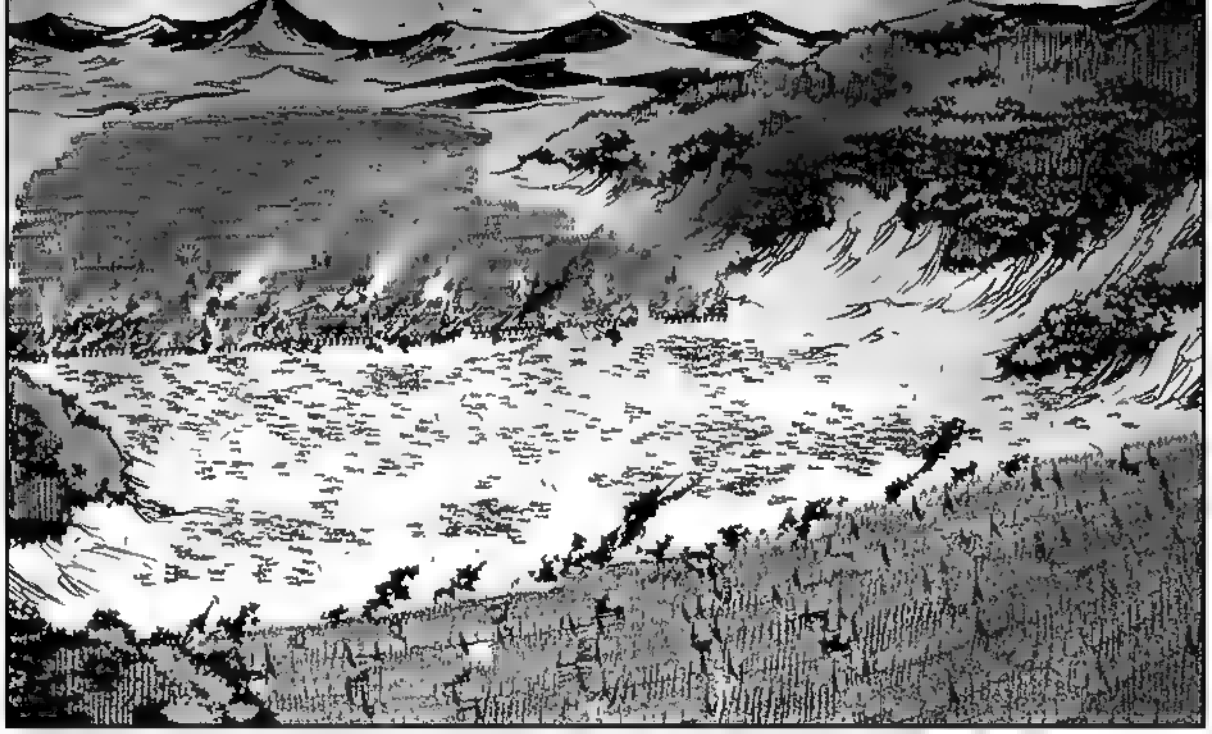
私は 自信が ないんだ
私は 湖畔修道会で 騎士になり
剣技も祈祷も 人よりもずっと早く 身につけてきた
天才だと もてはやされも したよ
相当に すごい力を 持っているのじゃ ないかって
自分でも 思っていた
でも
勇者に出会って そんな考えは 吹き飛んだ

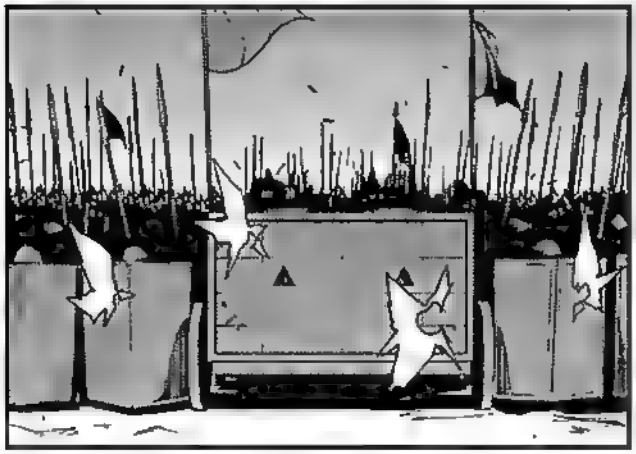
勇者の
見ている世界が
わからないんだ
私は勇者に
追いつきたくて
必死だけど
勇者はいつも
その先を走ってる
時に振り向いて
待っててくれる
それが
悔しいのも
あるけれど
それ以上に
勇者がいつも
寂しそうで
私は
自分の無力さに
押しつぶされ
そうになる
そうですね…
…かんけーない
…それでも
一緒にいればいい
それだけ
簡単
……

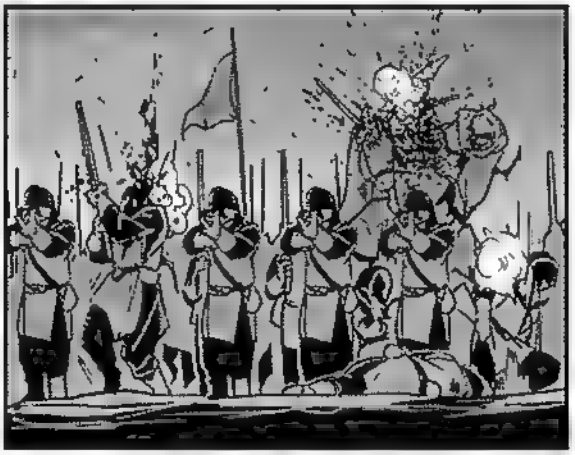
…最後まで
一緒にいれば
勝ち
今は
わからなくても
いずれわかれば
勝ち
そう
かな
…勝つ気がないなら
尻尾を巻いて
逃げればいい
最後まで立っている
ことなら得意だ
昼寝ばかりで
置いて行かれるのは
そちらではないか？
…その態度ほど
胸も大きければ
よかったのに
ゴゴゴゴゴゴゴゴ

…ゆずらない
それは
こっちの台詞だ
これに
気がつかないの
ですから
信じられません
それこそが
勇者の資質なのかと
疑うくらいですよ


ゴォン







六〇〇歩後退！

オオオオオオ

ワアアア

どうか
されましたか
冬寂王
いや
感心していた
だけさ
確かに
驚異的な
粘りですね
む？
でござるな

さすが
王弟元帥でござる
これだけ
指揮系統を炎られて
少なからぬ混乱を
引き起こされて
いるにもかかわらず
前線をおびき
出させないで
ござる
——拙者であれば
焦れて突出して
しまうでござるよ

こちらの突撃は
マスケットで
押さえながらも
向こうの目論見も
進行させているで
ござる

目論見とは
…合流か
開門都市
遠征軍
本隊
王弟軍
南部軍
おそらく
前線と本陣の
距離を圧縮して
数的有利を
得る戦術で
ござろうね
こちらも
織り込み済み
ですがね
崩すのは
やはり難しいか？
膠着はするで
ござろうね
決着は
持ち越しで
ござるよ

きめの細かい
用兵だな
姫将軍とやら
でしょうか

いいや
この感覚は
違うだろう

しぶとく不屈の
折れぬ槍の
ような気配だ
負けぬ戦いの
意志を感じる
南部も
層が厚い

馬を外された
あの馬車は
鉄板などで
補強されており
マスケットの
火力では破壊
できません

それに
あれは…
ただのマスケット
ではないな
射程距離が長く
命中精度の高い
マスケットか
――だが
数は少ない
ようだな

まもなく
後方から輸送中の
カノーネも到着します

あれは移動の
できる砦や
陣地のようなもの
…であれば
カノーネで
粉砕できる道理

カノーネさえ
あれば
たかが防御馬車の
群など 何ほどの
こともない

伝令！

後方部隊
カノーネ輸送班が
騎馬部隊による
強襲を受けて
います!!

な！

ふ
ワ
ワ
ハハハ
ハハハ
ハ

あの女将軍ならばやるだろう
先ほどから前線にその姿がないこと
いぶかしく思っていたのだ

うろたえるな！
カノーネ部隊には
最精鋭の
マスケット部隊を
護衛に貼り付けてある
容易く
落ちはせぬ！

南部連合軍や
魔族がいくら
あがこうと
奇策や奇襲などで
くつがえせる戦力差
ではない
われわれが
本体と合流したのち
やつらがどうする
つもりなのか
見せてもらおう
ではないか
ドン…
ドォン……

はぁ…
腹が減ったな

また豆のスープか…
たまには温かいパンを食いたいな

王弟元帥が食料を持ってきてくれるんじゃなかったのか？
ああ
後方から食料を補給する部隊だって
たくさん到着してるはずだ

それじゃなんで…
食料は貴族どもがかき集めちまった

灰青王は何をやっているんだ
教会に言われてどうにもならないらしい

こうなったらこれを食うしか…
ゴソ…
それは異端の…！

馬鈴薯さ
黙ってろよ
魔族軍からの略奪品のなかに入ってたんだ

懺悔集会に
出れば パンが
もらえるらしい

百合騎士団の
やってるあれか

俺は行くよ…
パンが食えるなら
なんだって…

おらも…

輜重部隊が？

ざわっ

ええ
南部連合や魔族に襲われ
守ることができたのは
ほんの二割ほどとか

おお…

なに
まだまだ
食料の備蓄は
あります

農奴兵どもは
飢えている
ようですが

しょせん奴らは
泥をすすってでも
生き延びるような
イキモノですからな

しかし
輜重部隊撤退の
責任は…
さよう
誰かが
取らねばならぬ

……
元帥閣下も
戻られたとか
ええ
今は包囲軍の
南側に布陣中の
ようです

……
まさか…

しかし
元帥閣下は瘴魔族の
領地へ別働隊として
進攻されていた
輜重部隊の
防備の責任は…

あるのです
なぜなら
「元帥閣下には
間に合った
可能性がある」
のですから

元帥閣下が
もっと急いで
救出に向かえば
輜重部隊の半分程度は
助けられたのでは
ないでしょうかね？

なにも
元帥閣下を失脚
させようという
話ではない
今回の
責任をとって
後方で
南部の豚どもの
相手をして
いただく
そうすれば
元帥閣下は失態を
埋め合わせることも
かなうでしょう

しかし
我らでは
元帥閣下の責を
問うことは…
であれば
教会にひと肌
脱いでもらうと
しましょう

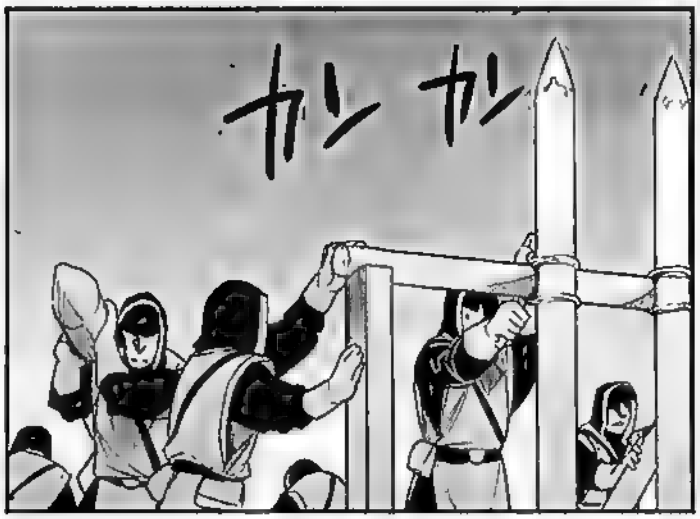
大主教猊下は
開門都市陥落を
望んでおられます
一刻も早く
開門都市を落とし
その事実をもって
異端の輩の心胆を
くじくことこそが
猊下のお心に
かなうかと
思います
ク…
クク…
くくく…
ふふふ…

ふふふ
光の精霊の
栄光に乾杯！
乾杯！
キン
元帥の
名誉のために
キン
猊下のために
遠征軍の
勝利に！
ドォォ…ン
ざわ
ざわ
カン
カン
だから
大主教様に
取り次げと
言っているだろう

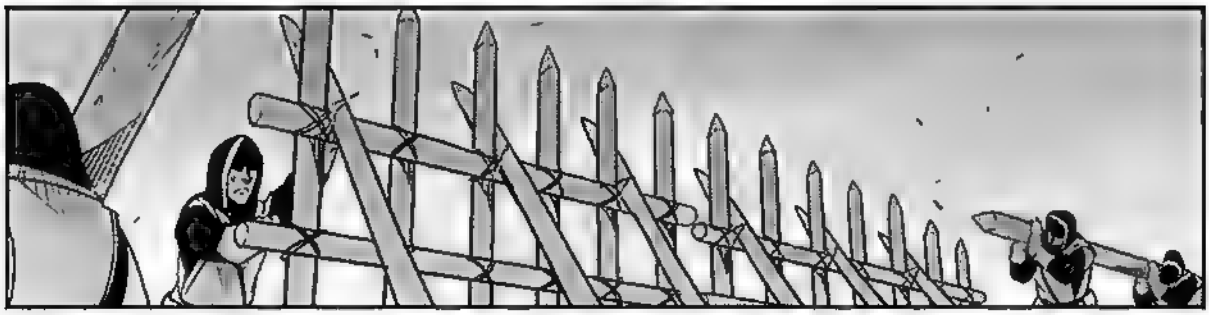
なりませぬ
猊下は
戦死者を弔うため
祈りを捧げて
おられます

チッ
ならば灰青王か
百合騎士団団長に…
お二人は
開門都市攻略の
指揮を執られ
多忙です

壁にカノーネを
撃っているだけ
ではないか
よい
南部軍には
どのみち私が
あたるしか
なかろう


カン カン

馬防柵の設置を急げ
ハッ



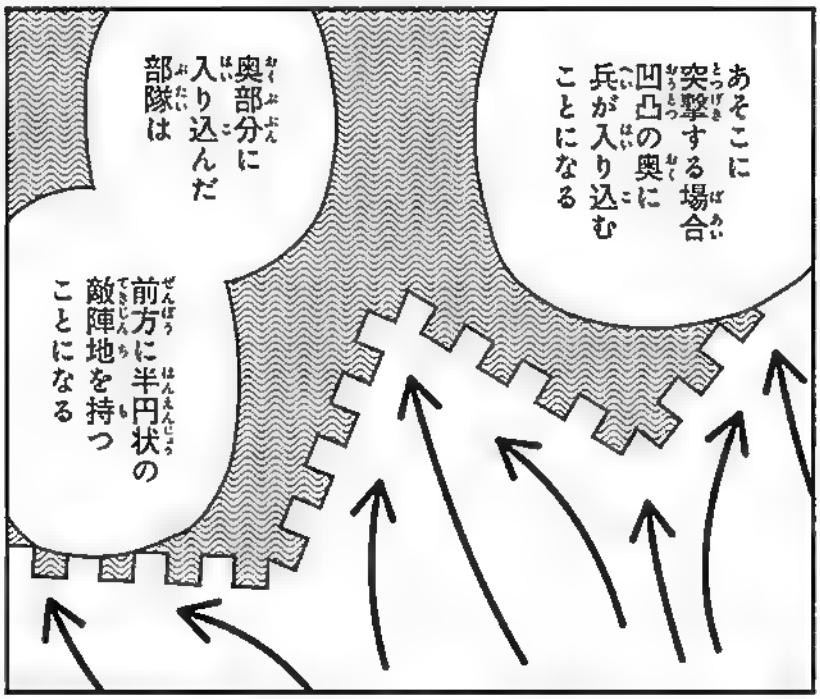
奇妙な陣ですね
あの陣か

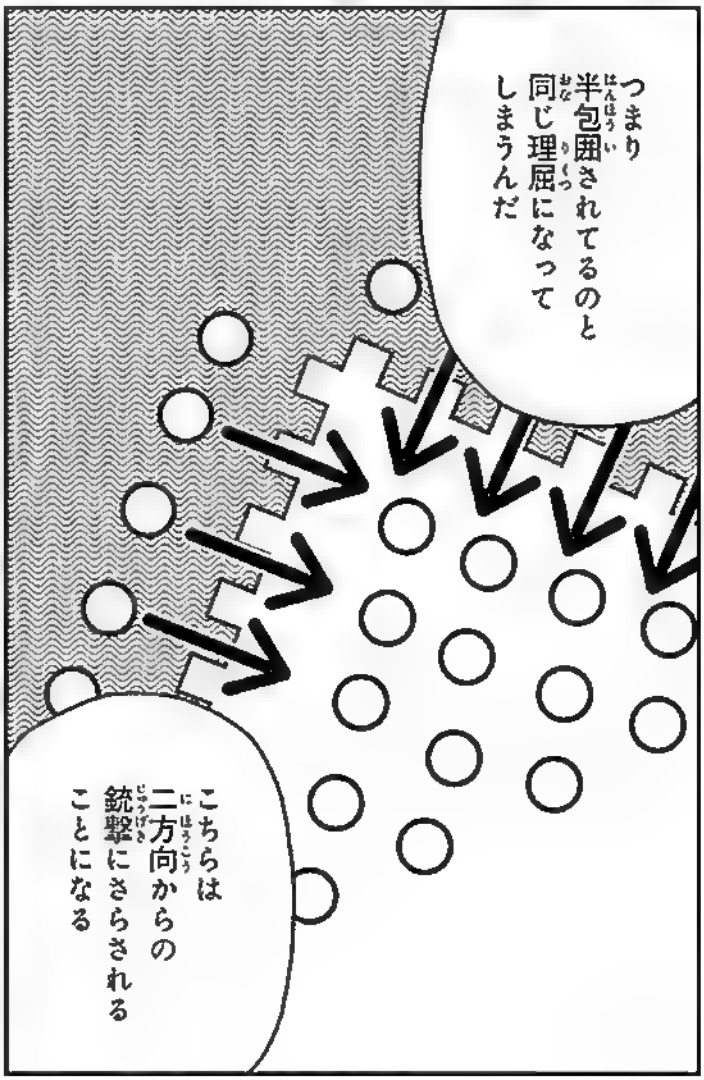
王弟軍の輜重部隊は本陣と合流…
遠征軍後方に陣を張ったようです
うむ

聖鍵遠征軍
後方守備の
あの陣地
――二重に
設けた馬防柵は
騎士の突撃を
受け止めた上で
そこにマスケットの
銃撃を浴びせかける
魂胆かと

わからないのは
あの防御線が
なぜ波打って
いるかですね

おそらくは
『密』を作り出す
ためだ
密とは？


あそこに
突撃する場合
凹凸の奥に
兵が入り込む
ことになる
奥部分に
入り込んだ
部隊は
前方に半円状の
敵陣地を持つ
ことになる


つまり
半包囲されてるのと
同じ理屈になって
しまうんだ
こちらは
二方向からの
銃撃にさらされる
ことになる

あの陣は
マスケットを
活かすための
殺戮陣だ
多数方向から
銃撃を浴びせかけて
火力を一点集中
させる工夫だ

あの防御線を
抜くためには
こちらにも
大きな犠牲が
要求されるだろう
南部連合を
引きつけて
大兵力にて
一気に倒す
それが
奴らの作戦だ
しかし
手出しせずに
このままと
いうわけには…
そう
…その場合
聖鍵遠征軍は
あの都市に攻撃を
続けるだけだ
では
おびき出せば!
それに乗って
くれるような
男ではない
でしょうなぁ
そうなると——
情報戦か

こちらの手を隠し
相手の手の内を読む
そのためには
情報が必要だ

開門都市の防壁が
どれほどもちこたえ
られるのか
聖鍵遠征軍内部の
物資の量

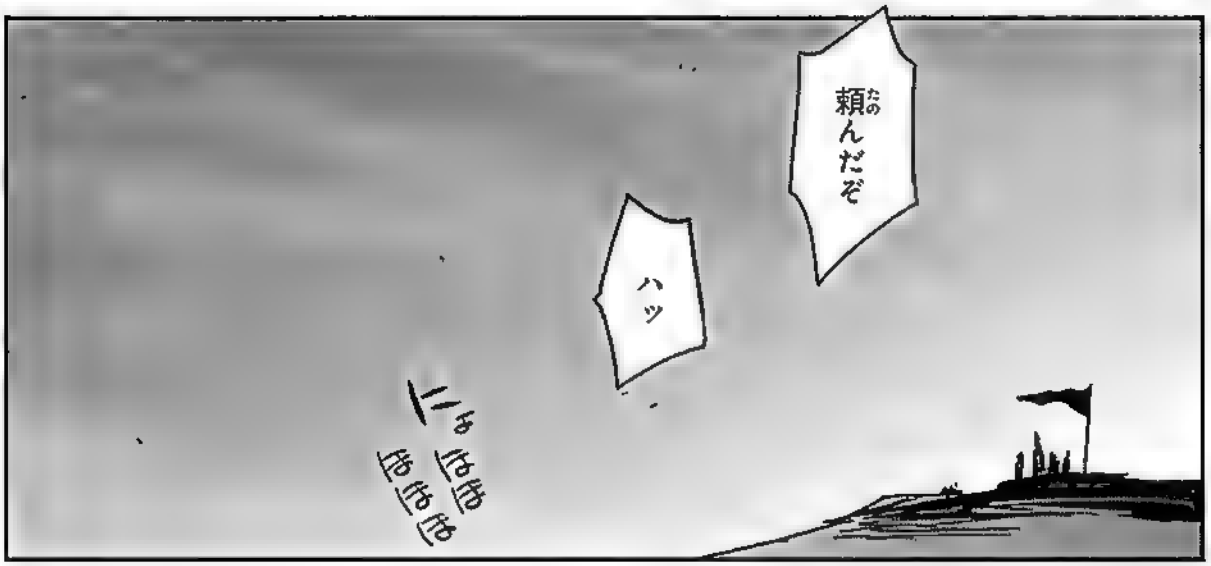
探ってまいり
ましょう
大部隊になれば
なるほど 潜り込み
やすいものです

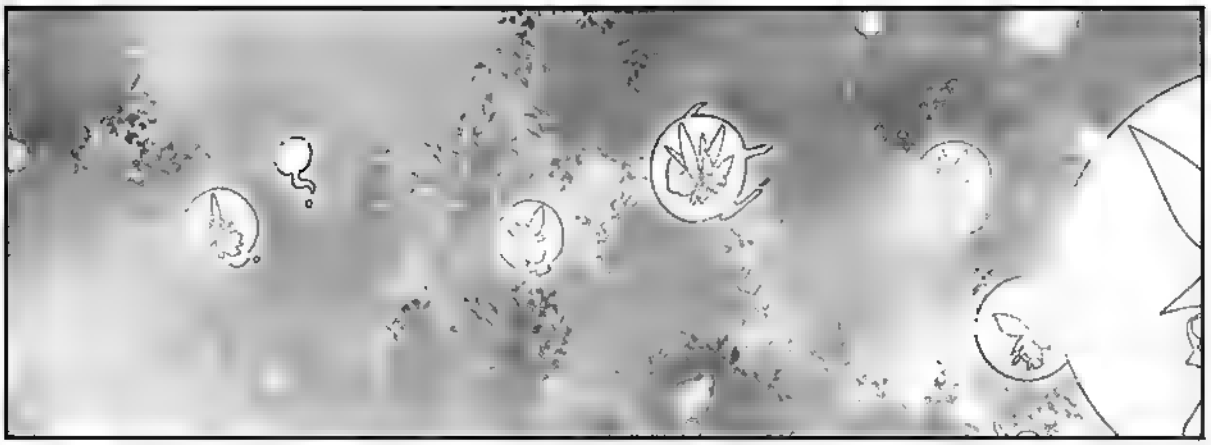
と
同時に
敵の情報を
遮断する必要が
あるな

斥候の対処
ですね
それは我らに
おまかせを

このあたりの
地理は 私たちが
一番詳しいですし
何より
精強な獣牙兵が
ついています

付近には
妖精族の者たちも
身を潜めているはず
密かに情報を得て
伝えるのは彼らが
最適です


頼んだぞ
ハッ
ニョほほほほほ



くりるたい
クリルタイ
くりるたい
くりるたい
忽鄰塔（クリルタイ）

忽鄰塔？
そう！
忽鄰塔！
人間族がまたもや
開門都市に迫って
きているんだ
魔王様が
立てこもって
必死に戦って
いるんだってさ
もしかして
人間の軍と
戦うための
忽鄰塔なのかな
そうかも
しれない
戦は…
怖いな…
忽鄰塔か…

でも
行かなきゃ
魔王様が
呼んでいる
もしかしたら
魔王様が助けを
求めているのかも
しれないよ？
忽鄰塔
忽鄰塔へ！
ドォォォ

！…
トシャッ…
精霊は
欲し給う
大主教猊下
ばんざーい！
ズル…
くっそう！
気が狂い
そうだ
あいつらは
おかしい
あいつらは
あいつらは
命をなんだと
思っているんだ
はあ
はあ
は…
精霊に…
光り…あれ…

魔王殿
ただいま帰参いたしました
公女
なぜ…

ご無沙汰していますね
学士様

商人殿!?

こちらは？
人間界有数の商人の組織『同盟』の幹部のひとりにして
人間の魔王とよばれる我が背の君
え？

どういうことなのだ？
魔王殿に頼まれていた援軍でございまする

私は援軍など頼んでいない
魔界すべてを滅ぼさせるわけにはいかないのだ
公女だってそれはわかっていよう

魔王殿は魔界の王でございまする
妾はこの街の自治委員会でございまする
この街に残るべきはどちらかや？
火焔山脈に退き後の再起をするべきなのはどちらかや？

魔王殿こそ何もわかっておられませぬ
それは…
しかし
この街は

学士殿にとっての絶対防衛線なのでしょう？

それにしても
魔王とは
びっくり
させられました
貴女に
驚かされるのは
何回目でしょうね

——それにしても
しょぼくれて
いますね
学士殿
あの日の私に
詰め寄ってきた
貴女からは想像も
つかないほどだ
今は身なりに
構うヒマなど…

そういう話では
ありませんよ
あまりにも
狼狽しすぎていて
みっともないと
言ったんです
!?

怒りましたか？
早く回転数を上げてください
貴女が魔王をさぼっているから
私のところにまで案件が持ち込まれているんですよ
いい加減に本気を出して仕事をしてくださいよ
している
しているではないか
だが人間の軍勢は…
できていません
そもそも魔王の仕事はなんですか？
都市防備の指揮ですか？
前線司令ですか？
ただでさえ貴女はそういう資質がないというのに
人がいないというのならばともかく
いながら使っていないだけではないですか

貴女の持ち味は
無限にも思えるほど
遠くを見渡す
視界の広さと
敵も味方も
ないほどに透徹した
バランス感覚
なんでも
お見通しで
博識な癖に
お人好しで
理想家で
本当は全員を
助けたいと
死にものぐるいで
願っている必死さ

貴女は
二番目に強力な絆は
損得勘定だと言った
それは一番が
神聖だったからでは
ないのですか？
正直
少しがっかり
しました
もっと
思考速度を
速めてください

大事な
臣下を失って
その痛みに
すくんでいるのは
わかります
だからと
いって
貴女の歩いている
道から 犠牲者が
いなくなるなんて
ことはない

貴女のやるべきことは目先の軍を防ぐことではない
違いますか？
――違わぬ
二分時間をくれ
――最初の問いは常に
「今問えばよいのは何か？」
だ
その答えにして次の問いは
「私はこの戦役の着地点をどのような位置にしたいのか？」
だな
だとすれば答えは決まっている
人間にも魔族にもこれ以上の被害を出させないように
双方に矛を収めさせる
そして平和条約だ

もしこの都市が
落ちれば魔族は
人間を恨む
人間は
魔界をただの
新しい植民地と
見なすだろう
それは
千年にわたる
争いの幕開けだ

この
開門都市こそは
その瀬戸際
血に染まった
歴史を見ぬために
この都市を
守らなければならない

遠征軍は確かに
強大です
その反面
弱点も存在する
補給力です

魔界は
そこを突けば
本来勝利は
難しくはない
開門都市を
捨てて
焦土作戦を
行い
遠征軍の
延びきった
補給線を叩き
時間をかけて
殲滅する

しかし
それでは
ダメだ
それでは
千年の遺恨が残る

そうですね
…だから
貴女だと
気がつきました

それが嫌なら
貴女の戦いをする
必要がある
敵に付き合う
必要はありません

そもそも
ここで亀のように
閉じこもっていても
勝てるわけではない
負けない
だけです

そうだな
…守りきり
さえすれば
聖鍵遠征軍が
軍を退く
というのは
希望的観測に
すぎないのだな

そんなことさえも
見通せなくなって
いたのか
無様な
私は…

承りました

？

このことを
話すのは非常に
気が重く
私としても
痛恨の出来事
であり
汗顔悔悟の至り
なのですが
とある権謀術策に
巻き込まれた結果
？

現在 私は
魔王を名乗るに
至っているのです
は？

ともあれ
そのような
事態で
私にも
この都市を救う
義務があるのだ
そうです

ええ
理解しなくても
かまいません
ん？
おおーっ
皆さ

ですから
この場は——
おまかせあれ

このような報告
庁舎の職員と
将官にまかせれば
いいのです
魔王殿には
魔王殿の仕事が
あるはず

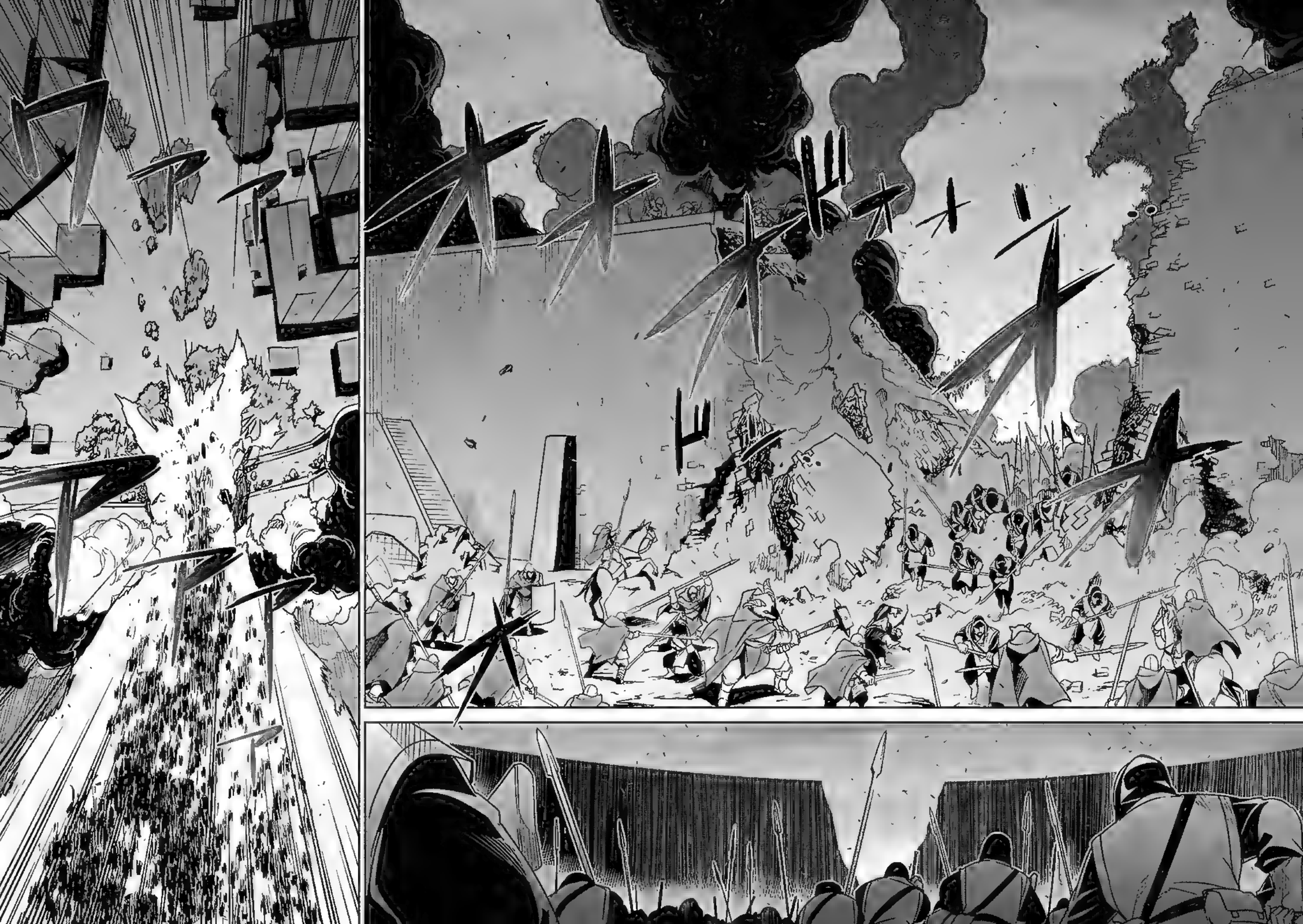
妾も覚悟を
決めました
この都市を
救うために
すべてを賭けて
戦う覚悟を

しかし
私がここで
足手まといだと
言っているのです
勇者の
いない魔王は
足手まといです
ゆえに
妾たちが
ここは支えまする
捜しに行って
ください
見ていられ
ません
ズズズ
?
魔王様！
何事ですか！

あ
あいつらは
その…
人間を…
人間が…
落ち着いてください
聖鍵遠征軍は
想像もできない
行為を…
人間が
爆発したんです

遠征軍の兵が
槍で突撃をして
きたかと思ったら
その身体ごと
巨大な爆発が

南門付近の
防壁が破壊
突破
されました！



ドォ…ン
ワーワー

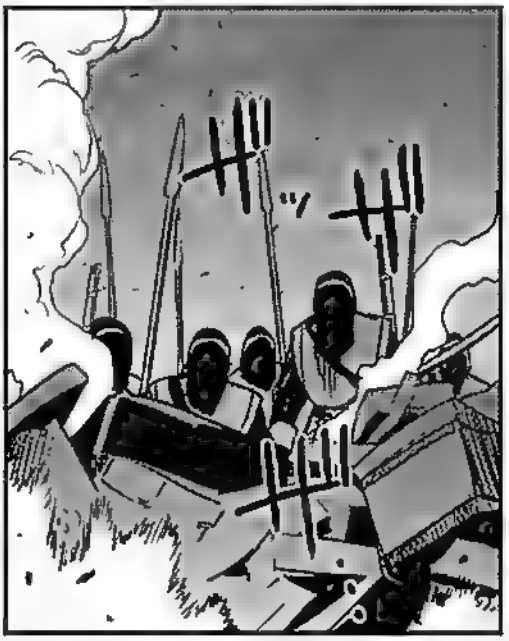
左右の商店を崩せ！
バリケードを作るんだ
おお

弓兵配置は終わったか!?
配置完了しました！

矢の尽きるまで撃ち込め！
すべての通用門封鎖！
防備部隊をここに集めろ！

地の利は
こちらにある
街路を封鎖して
敵をここで足止め
するんだ！

展開が
にぶい…？
南門を
爆破したのは
奴らにとっても
計算外だったのか？



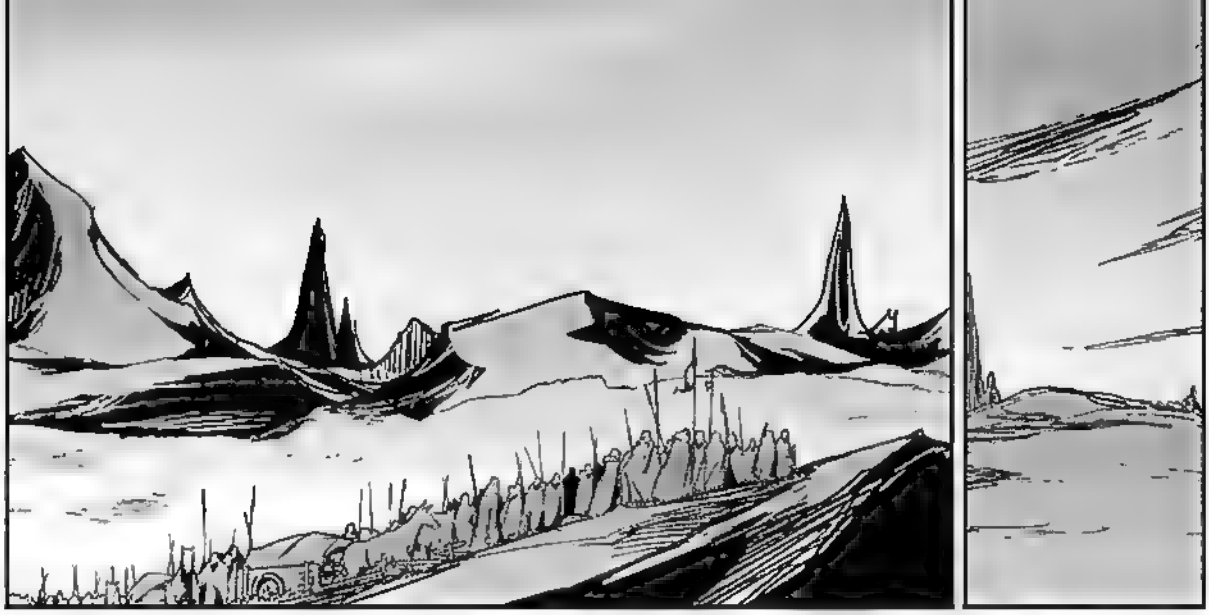
何はともあれ
連中はまだ
統制が取れて
いないようだ！
おおお
押し戻せ！

今なら まだ
押し返せる

防壁はどうなっている？
南門近くの防御用司令部に遠征軍が群がっているようだ
あそこには義勇兵しかいない
まずいぞ

俺が行く
鬼呼抜刀隊ついてこい！
おおっ
ワー
ワー

ドオオ…
ゴオオオ
……!?
何が起きている…？
殉教者の肉体は大地の花となり
魔王の城壁を打ち崩しました
その魂は精霊様の下へ召されるでしょう…

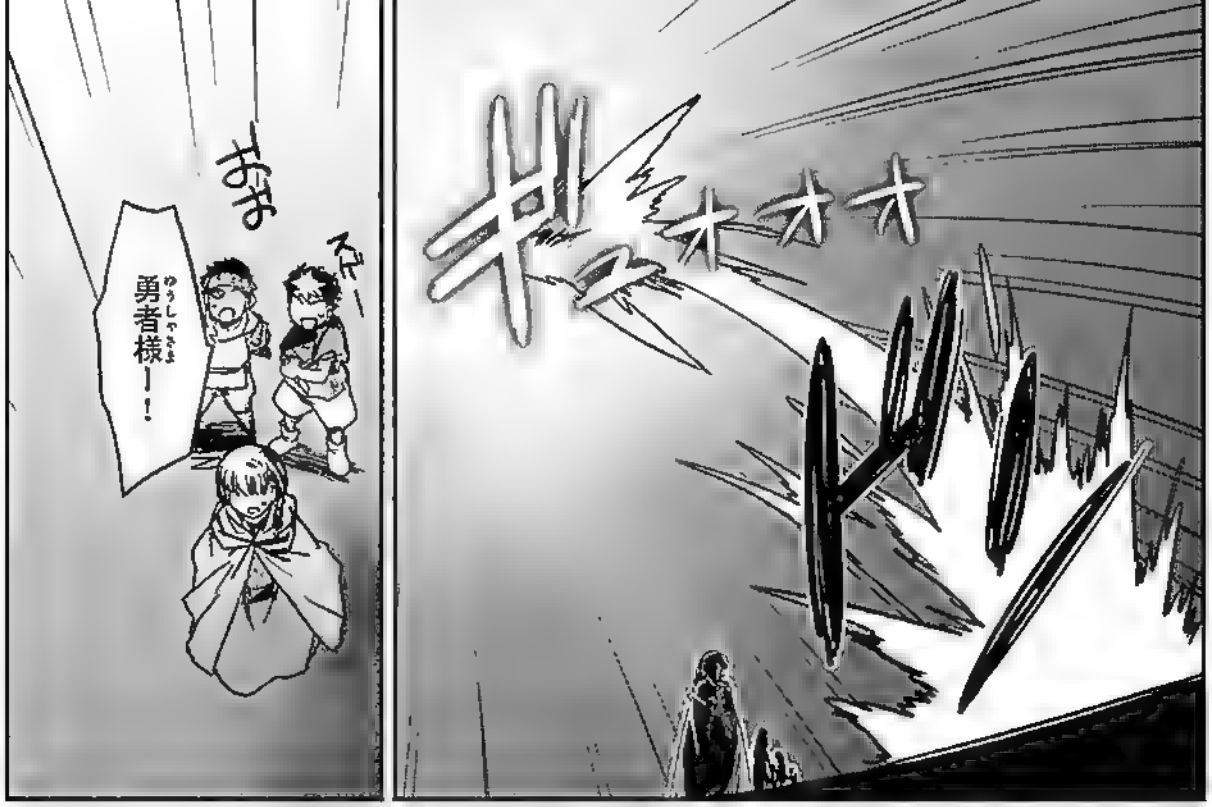


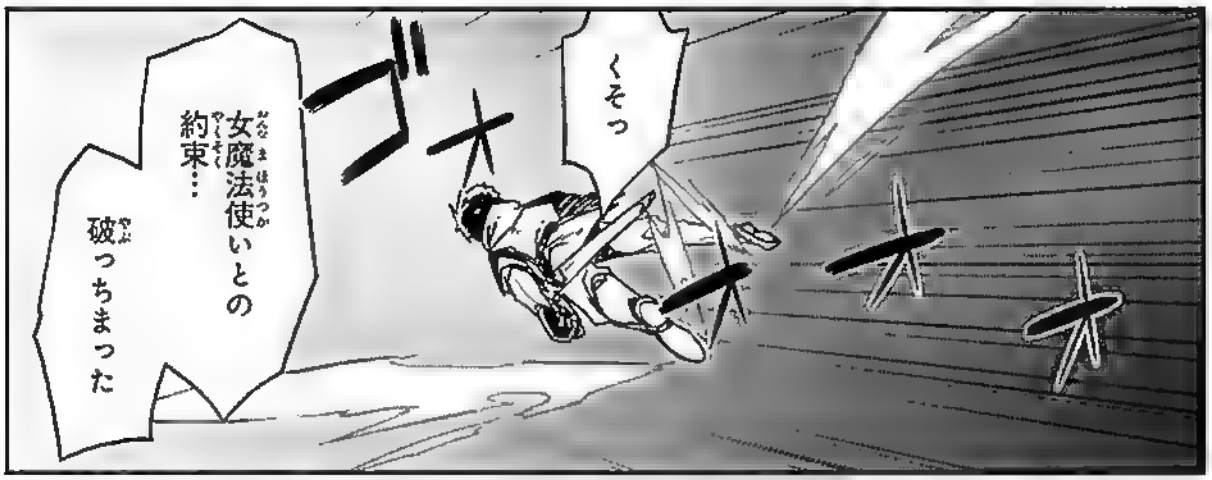
こちらでよいんですか？
ああ
夢魔鶫が言っている
どうやら火竜大公のやつ領地から出てきているらしいな
かえって手間が省ける

開門都市の近くで会えると思うぜ？
でしたら助かります
！
どうしたんですか？

な
火薬？
血
…死？
硝煙
破裂
破壊
なんだ
黒い煙!?
あれは…
開門都市の方向か？
ざわ
ざわ
とよ…
死んだ
何かが…
死んだ
死んだ
なんだよこれ
なんだこの真っ黒なのは

斥候に出る！
ガガガ
ざわ
何が起きているんだ
ざわ
どうする代行？
急ぎましょう
ペースを上げてください
悪いな
付き合えるのはここまでだ
え？
ドドド


おお
スゲー
勇者様ー！
ボォオオオ


くそっ
女魔法使いとの約束…
破っちまった
ゴオオオ

だけど…
こんなの我慢できるか
許せるかよ

縛りプレイだとかそんなこともう知るか

終 第五十二話 精霊は欲し給う！

第四十九回

自爆攻撃について

**自爆という本能に反した攻撃は
戦争という極限の状態のなかで
実際に死を前にした兵たちの
咄嗟の行動から生まれた。**

爆弾による兵士の自爆攻撃は、旧日本軍でも自軍の兵器で破壊不能な敵の兵器に対して使われたことがある。

戦争における特攻と自爆テロ

自爆による攻撃といえば、日本では太平洋戦争中の特攻隊が有名だ。特攻は兵器で敵の艦艇や施設などに体当たりをするという、搭乗者がほぼ戦死することを前提とした戦法で、航空機をはじめさまざまな兵器を用いて行われた。

特攻といえば日本というイメージがあるが、実は海外の軍隊でも日本と同じような特攻を採用していた例がある。例えば第二次世界大戦終盤で戦況が悪化していたドイツでは、一時的ではあるものの敵の重爆撃機に体当たりをするエルベ特攻隊という空軍部隊が編成された。そのドイツと戦ったソ連では、開戦当初に優秀なドイツ軍航空機との性能差を埋めるために特攻を行っていた。

ただ、これらに共通しているのは、相手の方が優位であること、その時点で有効な打開策が考えつかなかったという点にある。特攻を組織的に行った日本でも、戦況が悪化したためやむなく行った面があり、開戦当初から積極的に行っていたわけではない。

また、搭乗機が被弾して生還が困難と判断したり、味方に対する敵の攻撃を阻止する理由で、パイロットが自発的に体当たりを仕掛けることはたびたびあった。こうしたケースはアメリカ軍などの西洋諸国の軍隊にも存在している。戦争の最前線という極限の状況で、死を間近に感じた兵士が「ならば一矢報いよう」と考えるのは、どの国でも同じなのだろう。

人間も動物なので、生存本能は備わっている。先述したのは戦争というやや特殊な状況下での話で、基本的には自ら進んで死に向かうような行動はとらないものだ。

しかし、現代では戦争状態ではない平時に行われる自爆テロがある。被害を受ける側からすれば、自爆テロは日常で突然起こる犯罪であり、とても容認できるものではない。ただ、これもあくまで仕掛けられる側の話。

「平和だ」と思っているのは被害を受ける側だけで、テロを起こす側は常に戦争状態なのかもしれない。

かつて、戦争は国と国との戦いというのが常識だったが、現在では「テロとの戦争」という言葉も生まれている。こうした変化が、あらたな自爆の形を生み出したのかもしれない。

大砲の弾薬が尽きかけた聖鍵遠征軍は、兵士の自爆攻撃で開門都市の防壁を崩すことに成功した。

投資

物資の輸送指示を終えました
ご苦労
よく人員が集まりましたね
あの開門都市から避難した民だ
その多くが森まで逃げ延びて妖精族へと身を寄せるか
我が火焔山脈へ身を寄せておった
そのものたちの力を借りたおかげよ
それにしても馬車千台とは…
あの商人殿…自称魔王殿は
何を考えているのやら

まおゆう
魔王勇者
第五十三話

行くよ
はい

止めないのか
止めてよいのか考えているのです
我々の存在は貴方にとってはやはり重荷なのか
卑屈なのかもとも考えてしまいます
Z z…

第五十三話 Archenemy and Hero 52nd chapter

この開門都市には「終わり」がある

——たぶん
俺 人間じゃ
ないんだ
だって人間は
俺に優しくは
ないもの

でも人間じゃ
なかったら
なんだろうって
考えると
俺ってやっぱり
勇者なんだよね
人間に
生まれたこと
ないから
なんで
嫌われるかは
よくわからないん
だけどさ

人間は
人間以外のこと
好きにならない
みたいだってのが
わかるだけ
……

俺は確かに
救う理由なんて
ないけどさ
でもさ
やっぱりさ
全部を嫌いに
なるのは
無理

だって
みんな健気
なんだもん
優しいし
暖かいしさ
ただ
そういうのが
俺に向かって
ないってだけでさ

基本的に
人間はいいやつ
ばっかりだ
じいちゃんが
最後には
帳尻が合ったって
言ってたけれど
幸せだけなんて
ないんだよな
たぶん
帳尻が合うだけ

すべては
モザイク模様で
白と黒との
コントラスト
白だけとか
黒だけとか
そういう
手に入れ方は
できないんだな
「全部もらう」か
「全部いらない」か
しか選べない
セットメニュー
なんだよ
どうも
そうらしいって
やっとわかった
…だから
俺がどんなに
辛くても
誰かにとっては
大事なこの世界は
壊しちゃいけない
勇者…

爺さんとか
あの二人と一緒に
いるとさぁ

なんか
人間みたいな気分で
楽しいわけだ

だから
倒してきてやるよ
魔王を

――それくらいの
幸せは
三人から
受け取った

それにさ
やっぱ
モテたいわけよ

童貞だから

童貞ですからね…

トメ

にゃほほほ

期待しちゃう
わけよ

そりゃ
しますな

期待こそ
青春ですから

だから
そのうち
なんつーか
「私のものに
なってくれ」
なんて
言ってくれる
人が…
俺にだって
現れるかも
しれないじゃん？
そういうの期待
しちゃうんだよ
バカだから

あら？
灰青王様
どういう
ことだ
どうとは？

なにゆえ
あのように
無防備で意味のない
突撃をさせる!?
歩兵の
集団突撃など
愚の骨頂では
ないか!
クス
クス
クス

ましてや
あのような
自らの命を
散らす…

あれらの献身は
精霊様に対する
信仰の証

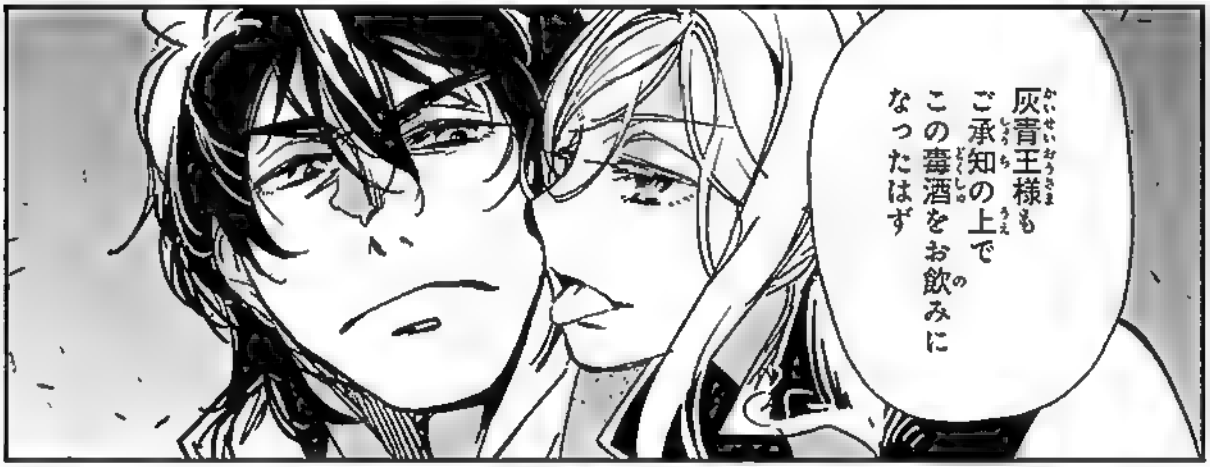
これは大主教猊下
直々の御指図なのです
馬鹿な…
大主教
自ら信徒を
使い捨てに…?

使い捨てだなんて
彼らは尊い犠牲ですわ
クス
クス
クス
それに…
猊下も その献身に心を痛めておいでなのです

その苦しみの何分の一かでもその身にお引き受けになろうと
自らの両目をお抉りになったのですよ？

…!!

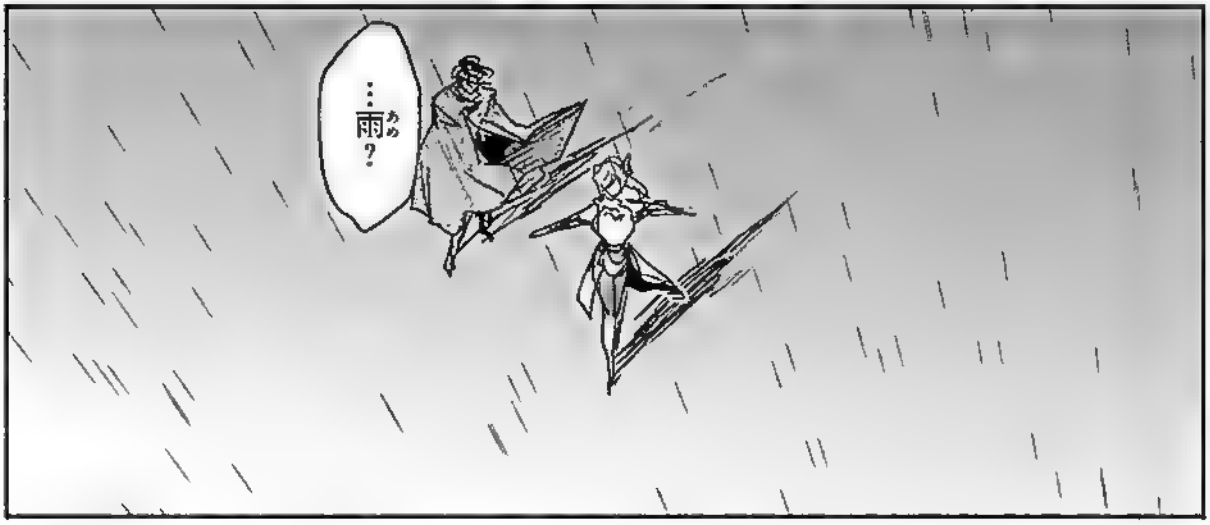
天に召された
兵士たちは
必ずや
光の精霊の
永遠の祝福を
味わっているはず
そのような
戯れ言


灰宵王様も
ご承知の上で
この毒酒をお飲みに
なったはず

俺は何かを
ごまかすために
心も寄せてない
女を抱いたことは
一度もない
それでは
王族とも
あろうお方が
こんな端女を？
それこそ
戯れ言ですわ

あの都市を
炎のなかに沈め
私たちの未来を
照らすかがり火に
しようでは
ありませんか

もはや私たちは
ひとつの船に
乗っているのです
この聖鍵遠征軍
という船に
途中で降りることは
許されません


…雨？

よし
雨雲はけっこう集まってきたな…
つぐみ！
魔王は!?
わかりません

しかし
防壁の一部が破られ
聖鍵遠征軍は開門都市内部に侵入した模様
離れてろ
はい

転移は
禁止
上級呪文も
禁止
勇者呪文も
ダメ
とにかく
勇者としての
力を使っては
いけない
それを
狙っている
相手がいる
そうでないと…
止められる人が
いなくなる
最後の
そのときまで
勇者は力を
使ってはダメ
女魔法使い…
すまない
だけど

みんなを守らなくて
なにが勇者だ!!

雷鳴よ
大気を切り裂き
黒雲を呼べ

すべてを包む
豪雨をもって
結界とせよ

『招嵐万雨呪』!

…ん？
雨？
プス…
あれ？
マスケットが…！
…動いた
は？

至急
司祭を集めよ
すべてのだ
かねてから
用意させていた
祈禱を行わせる
は
やはり
これだけの『死』に
我慢しきれずに
誘われ出たか
魔王の首で
門を開けることに
なるかと思ったが
もはや
どちらでもかまわぬ
いや
『勇者』であれば
さらに都合がよい
その力も我が
使いこなして
見せよう

フォ
オ
オ
オ
オ
オ
ア
ア
ア
ア
ゴゴゴゴゴ
…そこだ
はぁ
はぁ
はぁ

なんだ…
これ
力が…
吸われ…
ア

主上！
逃げろ
つぐみ…

ヒュウ
ウウ

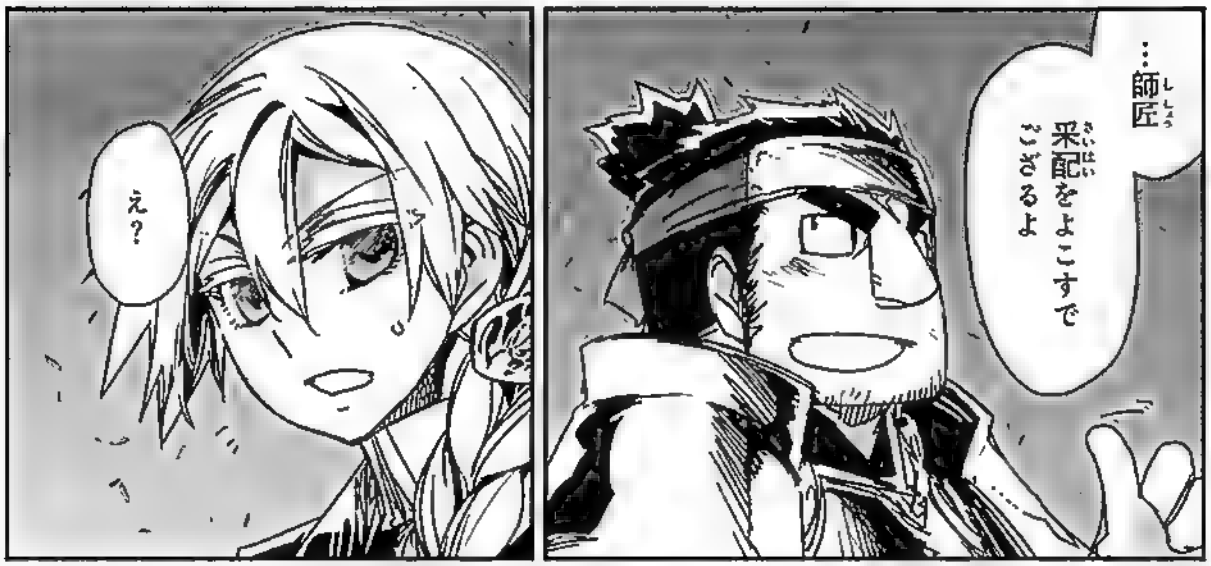
主上ー！

…魔王

ドオオーン
ドンドドン

急げ！
まだ馬が使えるでござる
馬車と馬車の間は五〇歩の間隔を守れ
前線に到着したら鉄盾の配置を忘れるな！
オオオ
医療部隊の配置完了
……

どうしたでござる？
いや
なんでもない
ただ…
胸の奥がざわざわするんだ
前線接触！
遠征軍のマスケット銃撃が始まりました！
この距離…
それは威嚇でござる！
進め！
今のうちに有利な位置をとるのでござる！
よし
車止めにて固定！
合図を師匠？
ん
ああ
すまない


…師匠
采配をよこすで
ござるよ
え？

ずっと考えて
ござった
拙者は 何に
なれるのかな
と
……

拙者は
師匠たちのようには
なれないでござる
でも
それでも
ここを支える
ことはできるでござる

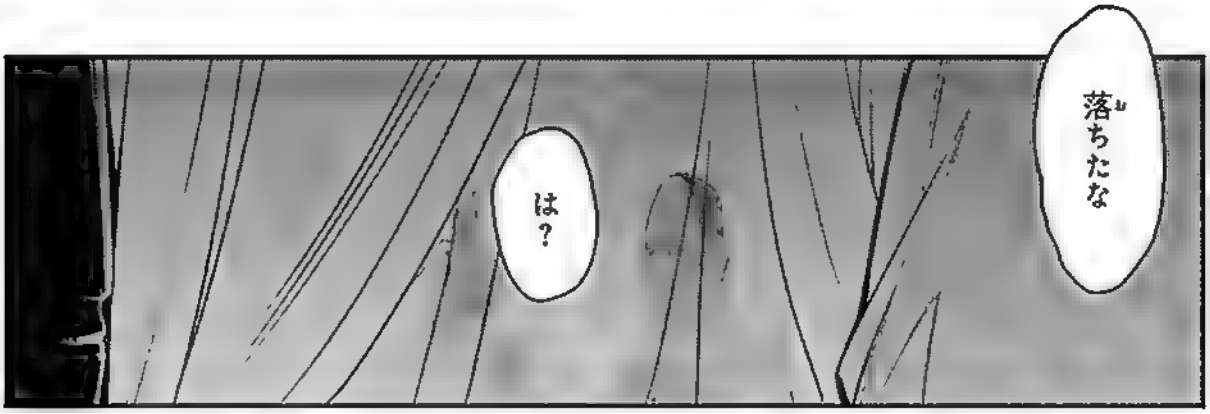
ここは
南部連合が
先陣
鉄の国護民卿
拙者の場所で
ござる

師匠の場所は
あの街にあるで
ござるよ
きっと…
あの都市で
待っているで
ござるよ！
おまえ…

今は駆け出す
ときでござるよ！
魂が
叫ぶとき
それは騎士の
使命を果たすべき
ときでござる
拙者は
騎士師匠に
そう習ったで
ござる！

ここは
大丈夫でござる
騎士師匠
ご武運を！
感謝するぞ！
我が弟子よ！
——お前は
まだまだ
終わったら
また しごいてやる
死んだりしては
ダメだからな

それは
お互いさまで
ござるよ
…街を
人々を
頼むでござる
そして
再び修業を
させてほしい
でござる


落ちたな
は？

勇者が
落ちた
祈りの結界に
閉じ込められ…
戦場に落ちた
その能力は
祈りの続く
かぎり…
腕の立つ
騎士の一人と
大差ない
聖なる
祈願を込めた
マスケットと…
騎士団で
捕らえることが
できる…
まさか
勇者が…

勇者は
光の精霊を
裏切ったのだ
精霊の遠征軍に
雷の刃を向けたのが
その証…

教会は
精霊の御名により
彼の者に異端の
烙印を押す

…!
は

よいか
必ずや
捕らえろ
むしろ
殺して…
しまえ
ただし
その首は…
持ち帰るのだ…

行け
行って
精霊の威を
遍く広めるのだ

承知しました

ズズズ
馴染む
馴染む
ゴロ…
力が…
満ちる…
…我は大主教
…光と闇を
兼ね備えし
…最後に
立つもの
世界を導く…
正しき意思を…
民に与える
もの…

進め…
光の信徒たちよ
勇者の亡骸を
我がもとに
もたらせ

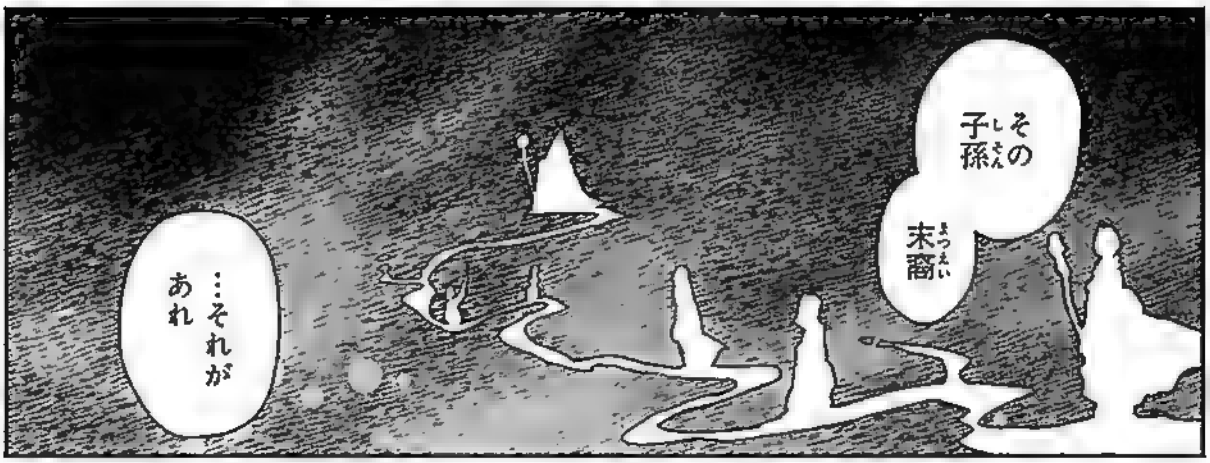
…あれは

あの男は
なんなのですか！

あれは
どう見たって
人間では
ありません
人間が
あんな
おぞましい魔力を
持つわけがない

…遥か昔
一四〇〇年前に
人間世界へと出た
図書館族

汚点
…一族の
ミス


その
子孫
末裔
…それが
あれ

そんな…
図書館族
ですって？
あれが
私たちの一族？

あれが
魔王と勇者が
やろうとして
いることの
もうひとつの
側面

まおー様は!?
勇者様は!?
フォー
魔王は死地に向かっている
勇者は死にかけている
お助けしなくては
なぜ止めるんですか？
勇者はすべてを賜けると言った
なんでも払うと言ったんだ
だから行かせない

あなたは
回路を調査する
私はそれを
修理する
それが役目
絶対だ

最初から不可能
だったんだ
今さら
魔王が死のうが
勇者が死のうが
可能性は
ゼロだ
ゼロは
ゼロ以下に
ならない

それでも
あの二人は
微笑みさえ浮かべて
それでも
構わないから
懸けると即答した

だったら
生き延びる
いや
死んでいたって
生き返る

最初から
不可能だった
どうせ
「その程度」じゃ
ダメなんだ

この
開門都市すべてが
生贄の祭壇
勇者か魔王の
魔力すべてを
注ぎ込み
その命を絶つ
ことによって
起動する

天空への架け橋
天塔機構
片方の死をもって
残りひとりを
「終幕」へと導く
崩壊装置
それは
終わりが呼ぶ
終わるための
終末の景色

それでも
あの二人は
その『終幕』を
拒絶するつもり
なんだ

最初から
奇跡の五つや六つ
揃わないとダメな
賭けだったんだ
だから
私はここを
動かない

勇者は私に
奇跡を望んだ

この世界には
奇跡が溢れている
あの二人が
そう言ったのだから
私は信じる
たとえ
それがどのような
荒唐無稽な話で
あっても

だから貴女にも
信じてもらう
私たちの知らない
どこかの奇跡が
あの二人を
救うことを
まおー様が
そんなことを？
言った
わかりました
――よろしい
でしょう
まおー様が
言うのならば
そうなんでしょう
まおー様を
信じましょう
奇跡なんて
信じないで
奇跡みたいな
冗談を言う人
ですからね

私は
あの人の
メイド
主人を
助ける
ために
奇跡を起こす
ものです

助かったな
ええ

なんで急に
あんな雨が
降ったのか
…おお
…珍し
…い

どうやら
奴らの使う
炎の杖は
水に弱いらしい
雨ですっかり
攻撃の手が
鈍ったからな

…今のうちに
少しでも 補修を
しなければ
カン
カン
おう…
南門付近は
…今でも
人間軍が？
…いる
…見える
幾つかの
かがり火が
見える
略奪も
見えますな
…すまねぇ
オレと同じ人間が…
戦いの
常識だ

こっちは
とにかく
防壁の保守と
バリケードの
横築を急ぐ
交代で
休憩も取れ
おおお
カン
カン

こんな
間に合わせでは
相手が本腰を
入れてきたら
守りきれない
…この
開門都市は
明日にでも
蹂躙される
奏楽子弟…
どこに
いるんだ…？
まだ
人間世界に
いるのか？

願わくは
戦火のない
平和な場所に
いてくれよ

魔王！
ガバ
ばっ

つく！
痛
ここは!?
戦は!?
あわてるな
ここは
開門都市の
廃屋だ
夢魔鵺が
連れてきて
くれた
朝までは
どちらの軍も
動けぬ
ここは戦場の
中心部からは
外れているし
おそらく
どちらの兵も
身を潜め
ここまでは
来ないだろう
今だけは
大丈夫だ

心配したんだぞ
もう会えないかと思った
そんなこと言うなよ
…でも
終わりがくるから

勇者には隠していた大事な話があるのだ

勇者は『終わり』ってなんだと思う？
？
私は『丘の向こう』が見たかったけれど
『丘の向こう』は『丘の向こう』であって『終わり』じゃない

『終わり』というのは
文字どおり
おしまいのことだ
その先がない
すべての
結末であると
いうこと
たぶん
私にとって
最初の終わりは
勇者との出会い
だったんだと思う
…あれが
たぶん
『終わり』の
ひとつの形

勇者の剣が
この胸を刺し貫いて
私は息絶える
あそこで
終わるのが
あり得るべき
本来の形だった
でも
私はそれを
否定して
そんなのじゃない
明日を探して
勇者と旅をした

いろんな
ことをしたな…

なんて
すごいんだろう
この旅は
前にも
言ったけれど
私が目指した
『丘の向こう』は
ほとんど見たよ

でも 私は
欲深いから
丘を登れば
次の丘にも
登ってみたくなる

丘の向こうには
新しい明日があり
そこには ささざまな
技術がある
技術は
人々を幸せに
してくれる

でも
そうして
生み出された
技術…

たとえば
農業の技術は
多くの生産物を
産みだし
余剰な人口を
支えることを
可能として

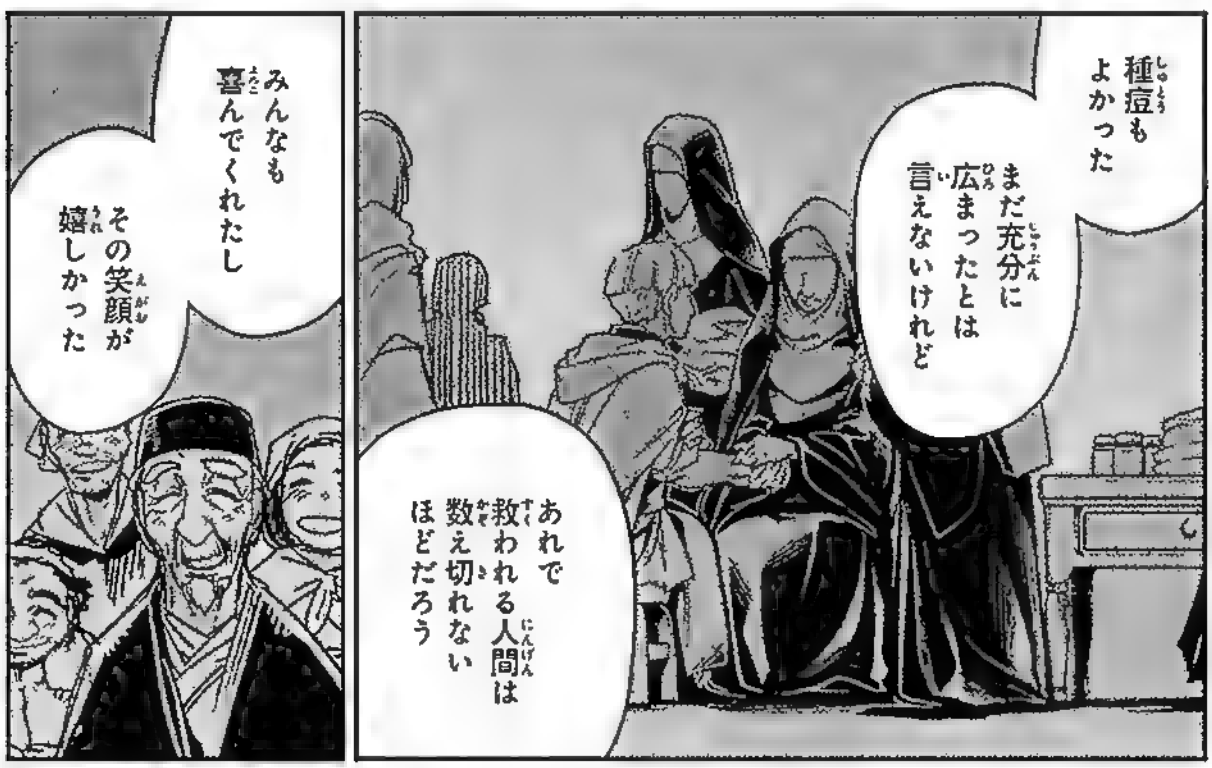
溢れた富は
さらなる欲望を
喚起した

火薬の技術は
軍事的な野心を
解放して
こんな
大遠征の軍さえも
引き起こして
しまった

——とても
たくさんの人が
死んでしまった

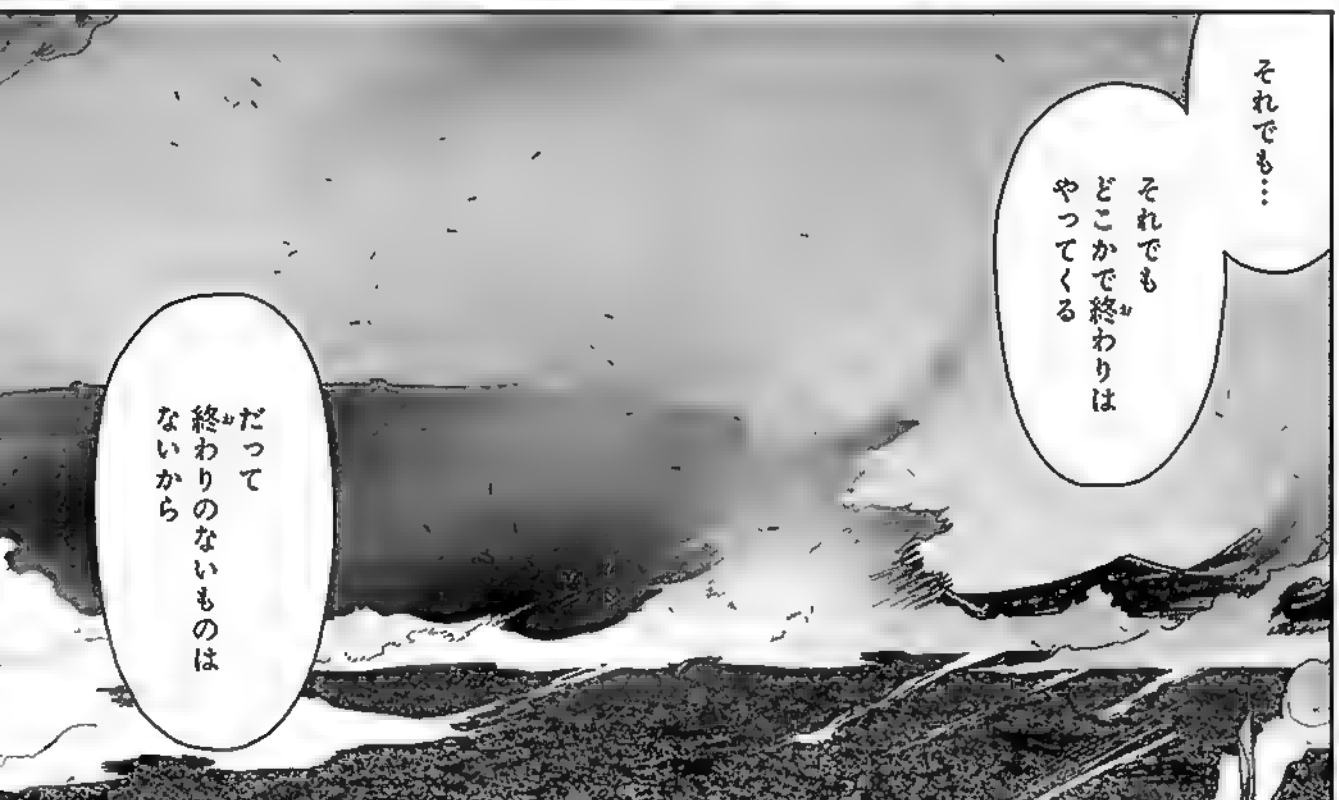
後悔は
ひとつも
していない
だって
勇者にも
言ってもらった
一緒に
行こうぜ
って
だから
後悔はない…
この胸の痛みは
後悔ではない

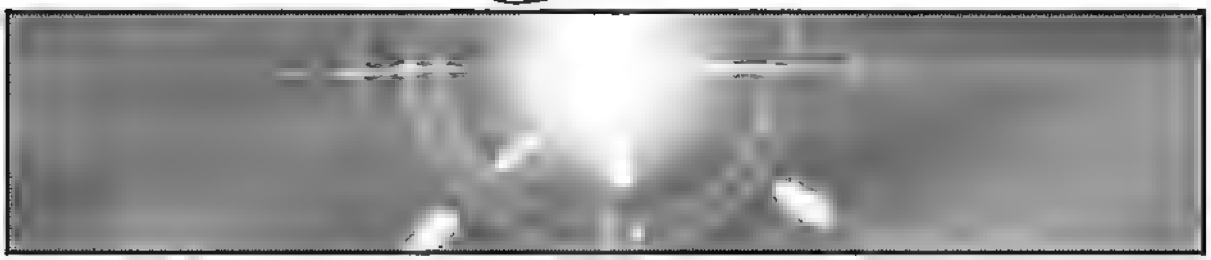
農業改革や
馬鈴薯
玉蜀黍で
人をたくさん
救えたと思う


種痘も
よかった
まだ充分に
広まったとは
言えないけれど
あれで
救われる人間は
数え切れない
ほどだろう
みんなも
喜んでくれたし
その笑顔が
嬉しかった

でも
それだけじゃ
ないんだ
だんだんと
歯止めが
利かなくなって
制御を外れて
いくんだ
よいことを
するために考えた
方策や技術が
結果として
災厄を引き起こす

感謝されたくて
始めたことでは
ないけれど
あの笑顔を
裏切るのは
身を切られるようだ
——なんで私は
こんなに弱くて
贅沢になって
しまったんだろう
勇者はそれでも
いいって言って
くれるけれど
それでも…


それでも…
それでも
どこかで終わりは
やってくる
だって
終わりのない
ものは
ないから



第五十二話 この開門都市には「終わり」がある 終

第五十回

祭壇について

**祭壇は昔から儀式に欠かせない。
形式は文明や地域で異なるが
信仰の対象と向き合うための
特別な場所という点は同じだ。**

女魔法使いは開門都市そのものが生贄の祭壇だという。これが真実だとすれば捧げる対象は何なのだろうか。

祭壇は信仰の対象と向き合う場

古来より、人間は神や精霊、死者の霊魂といった超自然的存在をはじめ、牛や蛇といった動物、果ては巨石まで、実にさまざまなものを信仰の対象としてきた。そして、こうした信仰の対象に供物を捧げる台が祭壇である。

祭壇の形や素材は、地域や文明、宗教などによってさまざま。技術が未発達な古い時代では、地面に獣の皮などの敷物を敷いただけのものから、台や板のような形をした自然石を用いた石壇、土を盛った土壇、石を積み上げた石積壇などが用いられた。技術が発達したのちは、木や金属などの祭壇も登場。さらには、神がつねに住まう場所として神殿が建てられるようになっていった。

日本でも馴染みのある宗教について見ていくと、キリスト教では聖堂内の正面に置かれている、前面に彫刻がほどこされたり布がかけられている台が祭壇となる。かつては木や金属でつくられたこともあったが、基本的に石造りという決まりがあるという。

仏教の祭壇としては、仏像を安置するための須弥壇や家庭にある仏壇が代表的。お盆の時期に、祖先や精霊を迎えるため一時的につくられる精霊棚も祭壇だ。神道では神像を祀った祠が祭壇にあたるほか、家庭などにもうける神棚も祭壇のひとつといえる。

祭壇に供える供物としては、キリスト教では「最後の晩餐」にちなんだパンとワイン、仏教では生花や水、菓子、神道ではお神酒や米、玉串など、宗教によってさまざまだ。太陽を信仰していた中南米の文明のように、祭壇に生贄を捧げていた例もある。

こうしたいわゆる宗教だけでなく、豊穣を祈願する儀式のような場でも祭壇は用いられていた。例えば、中国の湖南省で発見された6500年前の都市遺跡では、稲作の生産過程で行われる稲作儀礼で使ったと思われる祭壇が発見されている。

このように、祭壇の形態や供物は地域や文明によって異なるが、いずれも祭祀を執り行う者が信仰対象と向き合う場であったことは共通している。

数多くの自然現象が解明された現代でも、人々に信仰や先祖を敬う気持ちは残っている。これらがある限り、祭壇も人々とともにあるのだろう。

魔王が口にした開門都市の地下にあるという祭壇。そこにはどんな秘密が隠されているのだろうか。

老いた悪意

角川コミックス・エース
まおゆう魔王勇者「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」（16）

漫画：石田あきら
原作：橙乃ままれ
キャラクター原案：水玉螢之丞・toi8

©Akira ISHIDA 2015
©2011 Touno Mamare

2015年10月26日 発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
角川コミックス・エース『まおゆう魔王勇者「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」（16）』
2015年10月26日初版発行

発行者　青柳昌行
発行所　株式会社KADOKAWA
http://www.kadokawa.co.jp/

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8521（カスタマーサポート）
編集企画　コミック&キャラクター局
　　コンプエース編集部

装幀・デザイン：沼利光（D式Graphics）

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず
本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に
予告なく変更される場合があります。
ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。
この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

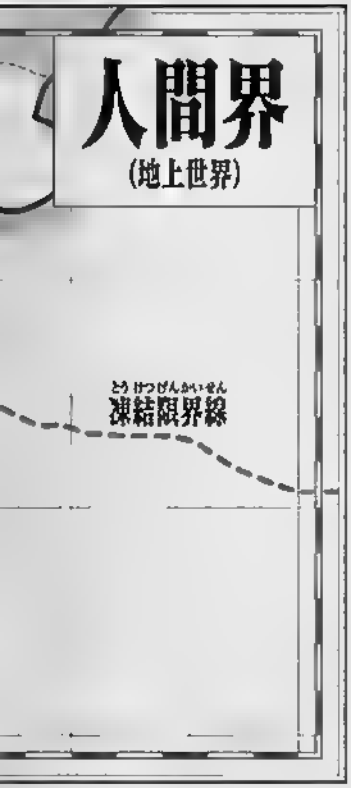
髪だけではありません
唇も
胸も
漫画・原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞+toi8
あくお
Archenemy and Hero
魔王 勇者
――「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」――

第五十話 Archenemy and Hero 50th chapter

答えはひとつ 平和だ

まおゆう 主要人物の所在

Lectures on Archenemy and Hero
Location of the Characters



冬寂王

鉄腕王

軍人子弟

南部連合首脳会議の決定を受け、準備を終えた南部連合軍が極大陸へ出発。大空洞を越えて魔界へと入り、現在は開門都市を目指して進軍中。

勇者

メイド姉

メイド姉は機怪族から蒼魔の地の所有権を取得。補給拠点確保に現れた王弟元帥と対峙し、勇者の助力を得て引かせることに成功する。

王弟元帥

遠征軍の後方が窮かされたことを知り、物資を輸送する輜重隊と合流すべく開門都市方面へ移動している。

大主教 ・灰青王 ・百合騎士団長

灰青王は攻略軍を指揮して開門都市への攻撃を続行。百合騎士団長は灰青王の補佐や大主教の世話をしつつ、信者たちの集会を開いている。

女騎士

執事

女騎士は、魔王が開発したライフルを手に修道院騎士団とともに魔界へ先行。執事とともに遠征軍の輜重隊や補給拠点を次々と襲撃している。途中で獣牙族の残党を率いていた東の砦将の副官と合流している。

魔王

東の砦将

土木子弟 ・蚊様の長 ・鬼畜の姫巫女

魔王が陣頭指揮にあたり、一丸となって都市を防衛中。

青年商人

火竜公女

火竜公女は湖の国から連れ出した青年商人と火焔山脈へ。火竜大公の議長権限で忽鄰塔（クリルタイ）の開催を要請した。

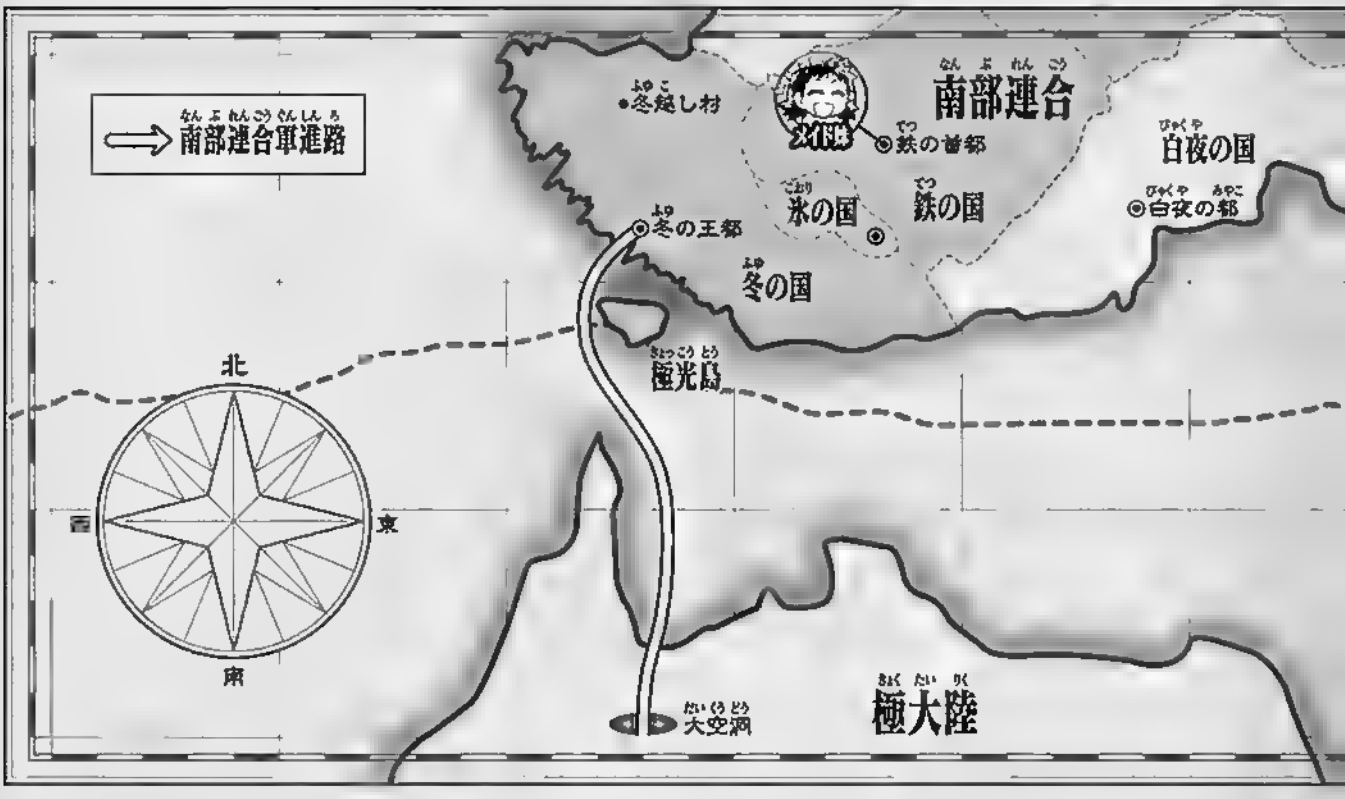
女魔法使い

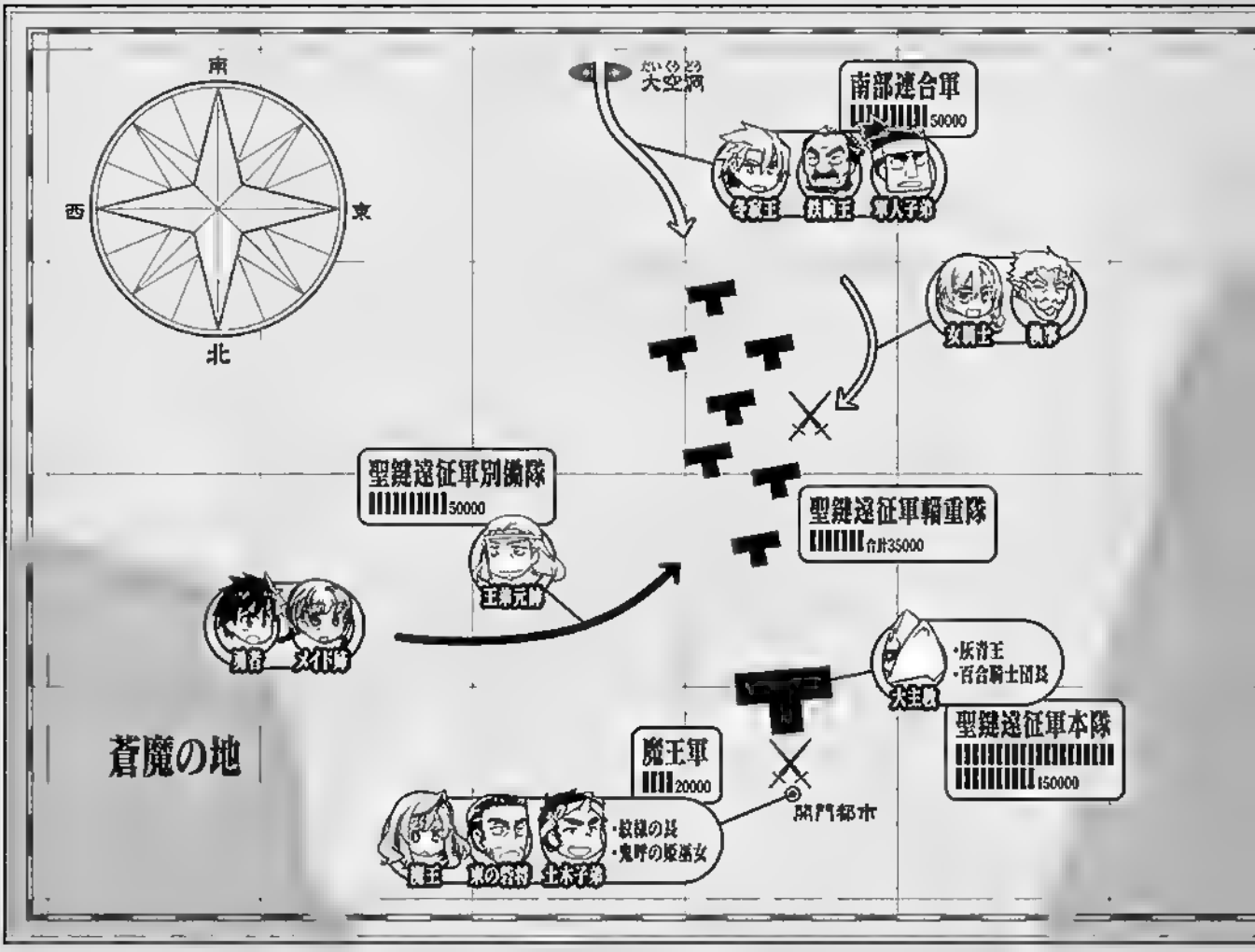
メイド長

過剰なまでの魔力を蓄えた女魔法使いは魔界のどこかにある「天塔」において、メイド長と共に何らかの準備を行っている。

開門都市をめぐる状況

開門都市に集結した魔族軍は、迫る第三次聖鍵遠征軍に対して攻撃を仕掛け、遠征軍が所持する大量のマスケットやカノーネ砲によって甚大な被害を被ってしまった。現在は都市に籠城して抵抗を続けているが、防壁を修復する資材が底をつきかけている。一方、遠征軍は都市の防壁を崩すべく、連日のように砲撃を行っているが、最新式の防壁を崩すことができず、やはり弾薬が尽きかけていた。開門都市の戦況が膠着するなか、女騎士や執事が遠征軍後方の補給拠点や輜重隊を攻撃。遅れて魔界に到着した南部連合軍も、開門都市へ向けて進軍を続ける。蒼魔の地へ向かった王弟元帥は、糧食の確保に失敗。得られたわずかな物資とともに開門都市へ戻り始めているが、これで遠征軍の物資不足は決定的となる。一方で、青年商人を連れた火竜公女は火焔山脈に転移。火竜大公に忽鄰塔（クリルタイ）の開催を要請した。


南部連合軍進路
南部連合
冬越し村
ユイ隊
鉄の首都
白夜の国
氷の国
鉄の国
白夜の都
冬の王都
冬の国
極光島
北
西
東
南
大空洞
極大陸


南
西
東
北
大空洞
南部連合軍
50000
冬将王
鉄騎王
軍人学校
剣士
聖鍵遠征軍別働隊
50000
聖鍵遠征軍輜重隊
合計35000
王弟元帥
義勇
ユイ隊
・妖滑王
・百合騎士団長
大主教
聖鍵遠征軍本隊
150000
蒼魔の地
魔王軍
20000
・蜘蛛の長
・鬼呼の原猫女
開門都市
魔王
東の将軍
土木学校

みんなを守らなくて
なにが勇者だ!!
雷鳴よ
大気を
切り裂き
黒雲を呼べ
すべてを包む
豪雨をもって
結界とせよ

『招嵐万雨呪』！